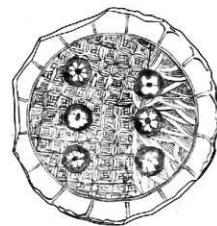


石川県 金沢市

片町二丁目遺跡（5番地点）

片町二丁目遺跡（5番地点）



平成26年 3月
(2014年)

2014

金沢市

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

石川県 金沢市

片町二丁目遺跡（5番地点）



平成26年 3月
(2014年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

目 次

第1章 金沢城下町の概要	1
第2章 調査に至る経緯・位置と環境	6
第3章 調査の概要	7
第4章 総括	48
写真図版	
報告書抄録	

凡 例

遺物について

1. 遺物図の縮尺は、次のとおりである。図版にはスケールを付し、表題末にも示している。

1/3 陶磁器、土器、木製品、石製品、金属製品、銭貨

1/4 瓦、煉瓦

遺物観察表について

1. 「番号」欄には、図版ごとに振り直した番号をつけている。
2. 「器種」欄には、磁器・陶器・土器などの材質も併記している。
3. 「法量」は、a・b・c・dの4欄に分けて記入した。計測部位は凡例図のとおりである。口径は最大径、底径は接地部径である。計測値のうち()数字について、陶磁器では復元数値に不安の残るもの、その他の遺物では現存長を示すのに用いた。
4. 「遺存」欄には、径を復元する際に利用した部位と遺存度を記した。
5. 「産地」欄には、器形や胎土等をもとに庄田が推定した産地を記してある。
6. 「実測番号」欄は、実測者の通し番号で、遺物・実測図に付している番号と一致する。
7. 「備考」欄の高台内圏線 A は高台付け根、同 B は高台内中央付近に圏線が描かれるものを指す。

例 言

1. 本書は、石川県金沢市片町二丁目172番、173番、175番、176番地内に所在する片町二丁目遺跡（5番地点）の発掘調査報告書である。
2. 片町二丁目遺跡（5番地点）では、金沢市都市政策局歴史建造物整備課による「まちなか学生交流拠点整備事業」に伴い、平成23年度に金沢市が発掘調査を実施した。
3. 発掘調査の期間と場所、面積は次のとおりである。

平成23年6月6日～8月31日（調査面積657㎡）
4. 発掘調査は、金沢市埋蔵文化財調査委員会（委員長 橋本澄夫氏、谷内尾晋司氏、垣田修児氏、横山方子氏）の指導の下で、庄田知充（文化財保護課主任主事）が担当した。
5. 本書の編集・執筆は、庄田知充と新出敬子（文化財保護課主査）が担当した。本文の執筆を庄田が担当し、遺物図版の割付・観察表の作成を新出敬子が担当した。写真撮影及び全体図編集は景山和也（文化財保護課主査）が担当した。
6. 本書に収録した遺物は、全て金沢市教育委員会が一括保管している。
7. 本発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の機関・個人からご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を申し上げる（50音順・敬称略）。

佐野律子（旧土地所有者）、石川県立図書館、金沢市立玉川図書館近世史料館、
公立大学法人金沢美術工芸大学
8. 屋内整理および製図は、次の方々に協力していただいた（50音順、敬称略）。

井川明子、蟹ヤエ子、車谷律子、境田早苗、関屋裕美、谷森真利、寺西悦子、土橋裕美、供田奈津子、
畑尾ゆか、法桑加代、門谷藤代、米田夕美子
9. 本書の遺構図の指示は以下の通りである。
 - (1) 遺構図の方位は全て座標北である。座標は世界測地系に基づく国土座標第Ⅶ系（測地成果2000）に準拠し、真北からは1分、磁北からは7度21分東偏する。
 - (2) 各図の縮尺については原則としてスケールを付し、表題末にも示している。
 - (3) 遺構図の水平基準は海拔高で、単位はメートル（m）で記した。
 - (4) 遺構名は、SE：井戸、SK：土坑、SD：溝、SP：小穴・柱穴、SA：石列・石積、SB：建物
SX：その他の遺構などの略号を用いた。
10. 本書の遺物の記述には、下記の分類編年案による時期設定や分類を引用した。

土師器皿の記述には滝川重徳氏による分類（滝川2002）を利用した。陶磁器の年代観のうち、堀内秀樹氏等による陶磁器編年案（堀内・成瀬2001）を引用した箇所については東大編年と略称した。瀬戸陶磁器については藤澤良祐氏による案（藤澤1998）を引用した。越前陶器については木村孝一郎氏による案（木村2004）を引用した。

凡 例 图

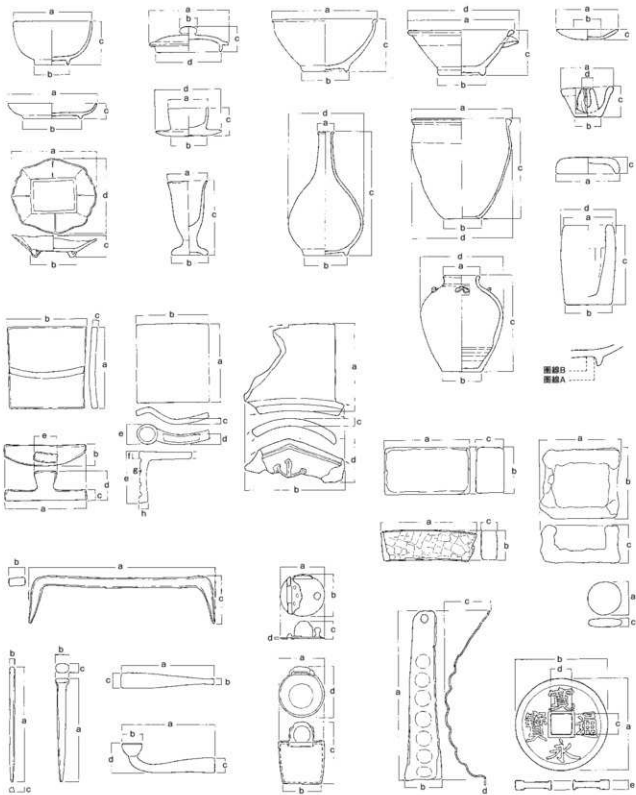
青磁釉

透眼子

釉面

胎土目-砂目痕

灯芯油痕



第1章 金沢城下町の概要

金沢城下町の前史として、近年、発掘調査により城周辺で奈良時代の古代寺院跡が発見されなど、市街地中心部に古代以来の中核的施設や集落が展開していたことが判明してきている。一般的には文献史料に基づく中世以降の発展過程が知られている。すなわち、中世北加賀の流通拠点だった山崎富市として端を発する現市街地中心部は、天文15年(1546)、浄土真宗本願寺金沢支坊としての金沢御堂がのちに金沢城が占地する小立野台地の突端部に築かれたことで、一向宗の拠り所となる寺内町として発達した。天正8年(1580)の佐久間盛政による御堂攻略後は、御堂跡地を城とし、織豊政権による近世城下町の形成が始まった。天正11年、佐久間に替わり前田利家が入府したが、このとき従った家臣団や商職人は城内に士庶雑居したとみられ、城内新丸調査区では天正期以前に遡る町屋遺構が確認されている。文禄元年(1592)以降、商職人は城外に移転し、近年の研究(木越2006)によると、慶長2年(1597)にはおよそ30町が成立していた。慶長4年(1599)には内惣構、慶長16年には外惣構を造成し城の守りを固



第1図 遺跡の位置

めた結果、城を中心として小立野台地両裾部を起点に河岸段丘崖の高低差を利用した東・西の惣構が内・外二重に城下中心部を囲うこととなった。また、元和年間(1615～1624)には犀川の流れを整理して河原を埋め立て、城下町域を拡大した。また、寺院を北国街道犀川口の寺町と浅野川口の卯辰山麓へと集め、すでに慶長年間に城の後背地にあたる小立野台に集められていた寺院群と併せて三大寺院群が形成された。寺院をして外部からの攻撃に対する防衛線とし、一向宗寺院を統制監視する役割をもねらったものとされる。寛永8年(1631)と12年の2度の大火により城と城下は大半が焼失し、街区改正の契機となった。上級武士を城近辺と城下の要所、町人を街道沿いに移動した。こうして17世紀中頃までには、金沢城下町の近世都市としての基本的な枠組みが完成した。宝暦9年(1759)と元禄3年(1690)に大火に見舞われたものの街区の大規模な変更はなく、城下町は周縁部を取り込みながら拡大を続け幕末を迎える。

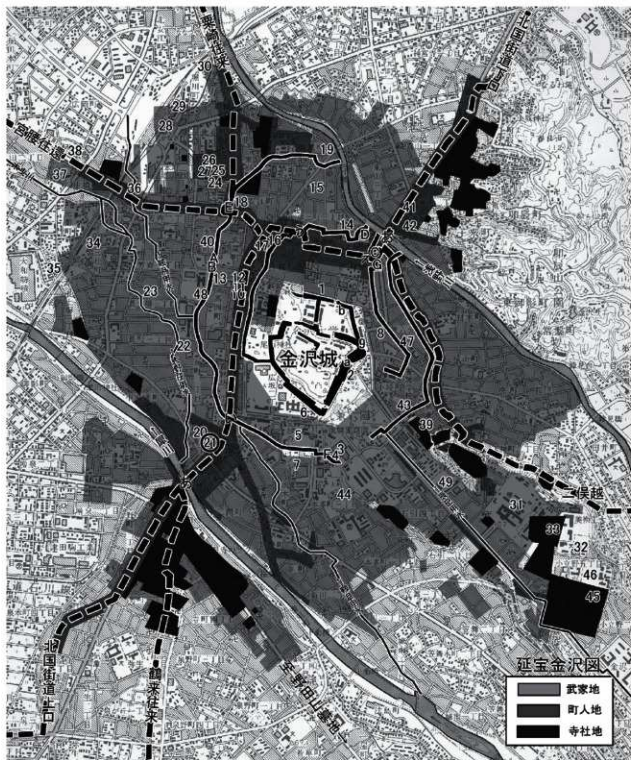
第1図は、2万5千分の1地形図(金沢 国土地理院発行)上に、延宝期金沢城下図(1674年頃・石川県立図書館蔵)の武家地と町人地、寺社地の範囲を示したものである。寛永大火後40年経過し、再建された城下町の様相を示す。北国街道をはじめ宮腰往還、二俣越など主要道路沿いに町屋が並び、寺社の周囲には門前町が広がる。武家地は街区部分の大部分、城下全体の約7割を占める(田中1976)。一定の禄高(概ね千石)以上の武家にはその家臣居住地として下屋敷地が与えられた。

参考文献

田中喜男「城下町の成立・変容」『伝統都市の空間論・金沢』公詢社 1976

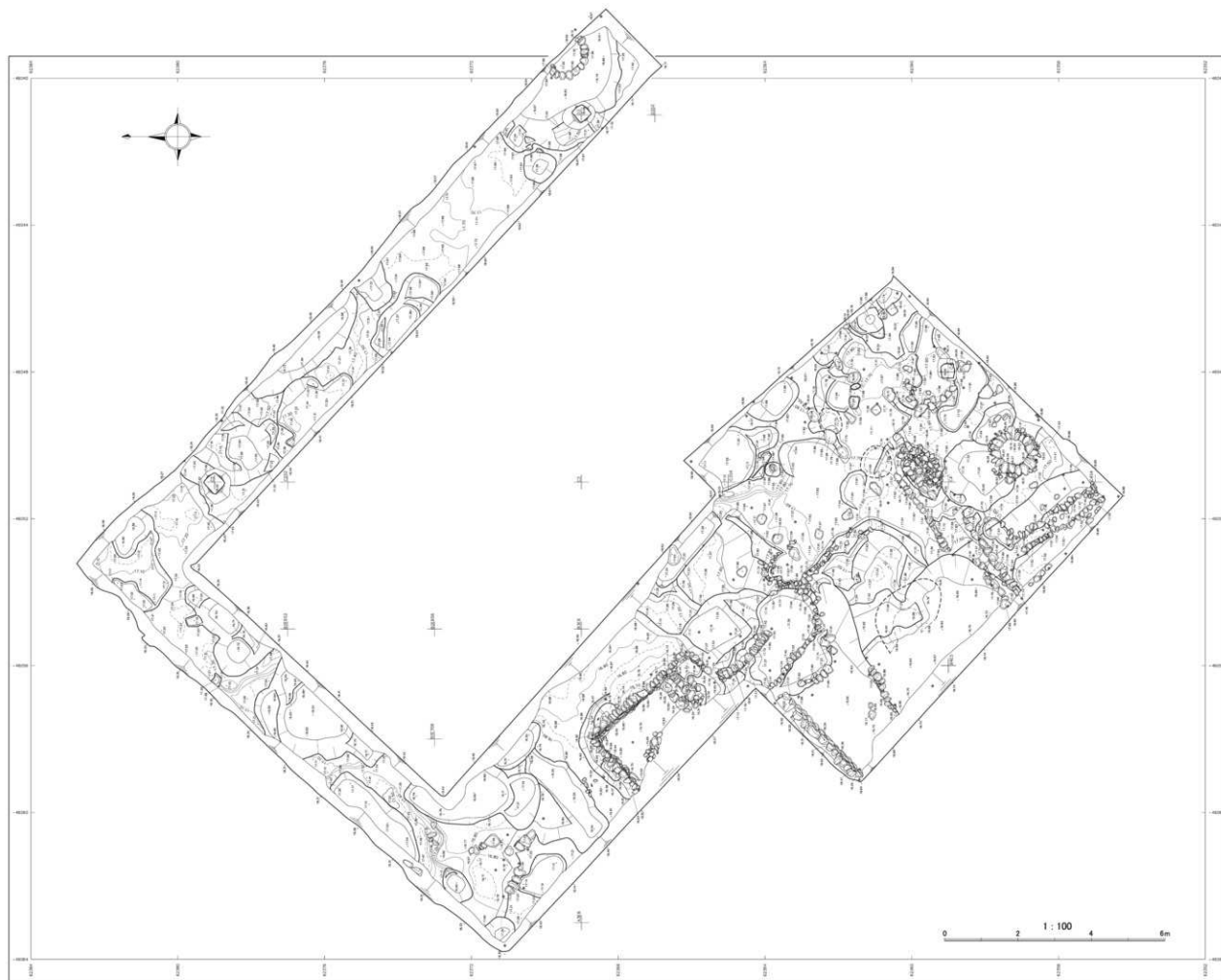
木越隆三「金沢城内惣構の築造時期について」『陶磁器の社会史 古岡康輔先生古希記念論集』桂書房 2006

金沢城研究調査編「よみがえる金沢城 1」石川県教育委員会 2006

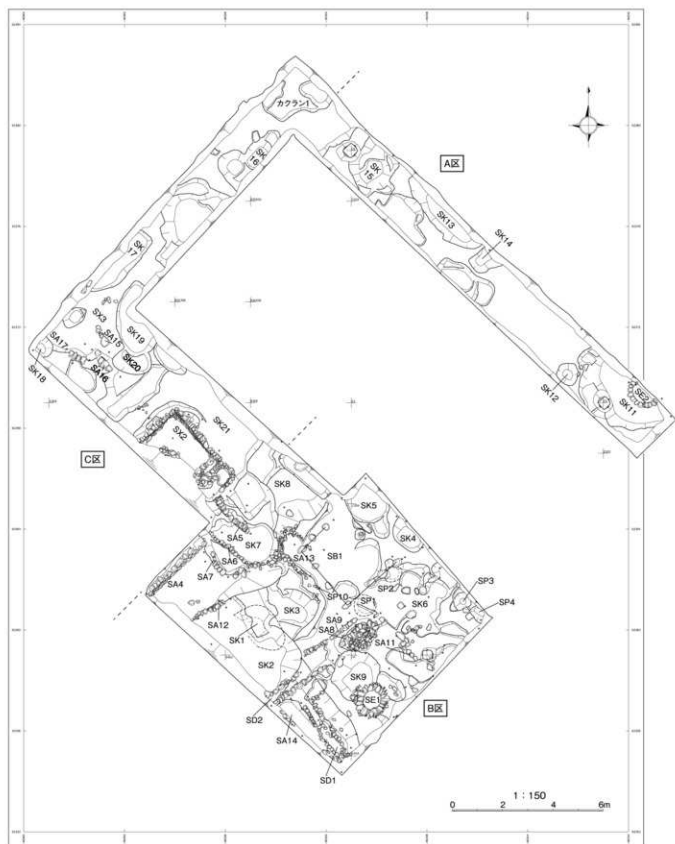


第2図 城下町復元図と調査された遺跡

1. 前田氏（長種系）屋敷跡地点 2. 兼六園地点 3,4. 本多氏屋敷跡地点 5,6. 広坂地点 7. 下本多町地点 8. 兼六元町地点
 9. 丸ノ内七番地点 10～13. 高岡町地点 14. 彦三町一丁目地点 15. 彦三町地点 16. 青草町地点 17. 下堀町地点 18. 安江町遺跡
 19. 瓢箪町遺跡 20. 片町二丁目遺跡 21. 片町二丁目遺跡（5番地点） 22. 長町遺跡 23. 穴水町遺跡 24～27. 本町一丁目遺跡
 28. 木ノ新保遺跡（七番丁地点） 29. 木ノ新保遺跡（北安江地点） 30. 久昌寺遺跡 31,32. 宝町遺跡 33. 経王寺遺跡
 34. 三社町遺跡 35. 元菊町遺跡 36. 昭和町遺跡 37. 長田町遺跡 38. 醒ヶ井遺跡 39. 東兼六町五番地点 40. 玉川町遺跡
 41. 東山一丁目遺跡 42. 東山南水溜跡 43. 東兼六地点 44. 本多町三丁目地点 45. 小立野四丁目遺跡 46. 小立野コミノマチ遺跡
 47. 兼六元町7番地点 48. 長氏屋敷跡 49. 飛梅町3番地点
 A, B. 西外惣構跡武蔵町地点 C. 東内惣構跡枯木橋北地点 D. 西内惣構跡主計町地点 E. 西外惣構跡升形地点
 F. 西外惣構跡本多町三丁目地点 G. 東内惣構跡枯木橋南地点
 a. 金沢城跡（石川門前土橋地点） b. 金沢城跡（新丸第2次調査）
 あ. 屎川大橋 い. 香林坊橋 う. 袋町橋 え. 枯木橋 お. 浅野川大橋



第3図 片町二丁目（5番地点）遺構全体図（S=1/100）



第4図 遺構配置図 (S=1/150)

第2章 調査に至る経緯・位置と環境

(1) 調査に至る経緯

平成22年(2010)、金沢市歴史建造物整備課から、片町2丁目169番2、170番、172番、173番、175番、176番657㎡について、まちなか学生交流拠点整備事業予定地として遺跡の調査依頼が提出された。文化財保護課は、これを受けて同年9月8日に試掘調査したところ、近世期の整地層が確認された。本調査地は、平成23年4月1日から周知の埋蔵文化財包蔵地として周知化された金沢城下町遺跡の範囲外ではあるが、文化財保護課としてはその関連遺跡として記録保存による遺跡の保護を図ることが必要であると判断し、この結果をもとに両課で協議し、地下遺構に影響を及ぼす新設の建築物が計画されている200㎡を調査区として平成23年度に発掘調査を行うことで合意した。

発掘調査は平成23年6月6日～同年8月31日にかけて実施し、屋内整理および発掘調査報告書作成は、平成24～25年度に実施した。現地における遺構の測量については、土層断面・エレベーションを手実測、平面・石積み遺構の立面をデジタルカメラ(手持ち・ボール撮影)を利用したオルソ写真(レンズ補正写真)図化により行った。

(2) 位置と環境

金沢市は、日本海に向かって突き出す能登半島の付け根付近に位置する。市の南東部には奈良岳・奥三方山・大門山など海拔1,500mを超える山地を抱え、この山を水源とする犀川および浅野川の二大水系が市域を三分している。市街地の中央に位置する金沢城は、犀川・浅野川中流域に挟まれた小立野台地先端にあり、城下町は台地上および両河岸段丘上から扇状地にかけて展開する。

片町二丁目遺跡(5番地点)は、金沢城からみて南西方向にあり、現在の街区表示では片町二丁目5番地内に立地する。調査地の南東方向には、市道および街区を挟んで国道359号線(旧北国街道)があり、調査地は、西の福井方向からきた旧北国街道が犀川大橋を渡った川南町から片町にかけての町屋が建ち並ぶ繁華街の裏露地に面した武家屋敷街だった。



第5図 調査地位置図

第3章 調査の概要

(1) 調査区の概要

調査地は、調査直前まで駐車場として利用されていた。旧地権者によると、駐車場の前は北西に隣接する旧地権者所有の民家の庭園だったということである。

調査区は、まちなか学生交流拠点整備事業における交流ホール建設予定地のうち、建物外周をめぐる廊下・裏舞台・収納スペース・前室・副玄関・緑・土緑および付属するスタッフルーム・便所・風防室部分に設定した。交流ホール中心部については、移築建物で地中梁以外の基礎が地下の遺構面に影響を及ぼさないことから、発掘調査対象外とした。交流ホール中心部の地中梁および、駐輪場の基礎部分については、掘削規模が狭小であったため、工事時に立会調査を実施した。

調査区は、南東辺が開口するコの字形を呈し、北東辺をA区、南東部の矩形部分をB区、南西角のL字形部分をC区とした。

(2) 遺構

建物 (SB)

SB1(第6図) B区北東部から南東部にかけて礎石と考えられる14個の扁平な石材を検出した。そのうち、①～⑦については、北西-南東約2.7m、北東-南西約2.7m以上の推定矩形的礎石建物で、方位軸は座標北から約40度西偏する。

SB2(第6図) B区南東辺付近で検出したSA1～3で構成される1段積みの石列を基壇とする建物(約4.6m×3.2m以上)である。南東側は調査区に続くため、全体の形状は不明である。枕状(幅約25～43cm、厚さ約16～26cm)の安山岩質川原石の小面の一面を大きく割って奥行き約20～49cmの石材とし、割面を矩形的建物外側に向けて一列に並べている。隅角部分には直方体(幅約30cm、厚さ約25cm、長さ約40cm)の凝灰岩質切石を他の石材よりも約10cm高く据えており、北隅角部分では両隣の川原石も同様の高さとしている。主柱の載る四隅の石材を礎石として壁材の載る石材よりも高くしているものと考えられる。礎石部分では、約15～30cm整地層を掘り、拳大の礫を根石として詰め込んでいる。石列直下から明治期のものと推定される九谷焼の色見磁器片が出土しており、近代以降の建物の基壇と考えられる。

石積み・石列・列状集石 (SA)

SA1(第6図) B区南東辺付近でSB2の北東辺を構成する石列として検出した。長さ3.0m以上、高さ約0.35mで南東端部は調査区外へ延びていく。

SA2(第6図) B区南東辺付近でSB2の南西辺を構成する石列として検出した。長さ3.2m以上、高さ約0.35mで南東端部は調査区外へ延びていく。

SA3(第6図) B区南東辺付近でSB2の北西辺を構成する石列として検出した。長さ約4.6m、高さ約0.35mを測る。

SA4(第7図) B区北西角付近の調査区壁面近くで検出した長さ約3.1m、高さ約0.55mを測る北東-南西方向4段積みの石積みである。小面の幅約12～20cm・厚さ約12～20cm、奥行き20～30cmの安山岩質川原石を使用し、小面を大きく割り揃えている。本調査区内で最も天場レベルの高い遺構である。

SA5(第7図) B区北西部で検出した長さ約1.9m、高さ約0.5mを測る北西-南東5段積みの石積みである。小面の幅約12～30cm・厚さ9～20cm、奥行き22～27cmの安山岩質川原石を使用し、南西を向いた小

面には自然面を残す。

SA6(第7図) B区北西部で検出したSK7を縁取る北西-南東方向1~2段積みの石列(石積み)で長さ約1.75m、高さ約0.15mを測る。小面の幅約8~18cm・厚さ7~12cm、奥行き15~23cmの安山岩質川原石を使用し、南西を向いた小面には自然面を残す。

SA7(第7図) B区北西部で検出したSK7を縁取る北西-南東方向1段積みの石列で長さ約1.05m、高さ約0.17mを測る。小面の幅約10~20cm・厚さ10~18cm、奥行き22~28cmの安山岩質川原石を使用し、北東を向いた小面には自然面を残す。

SA8(第7図) B区中央付近で検出した長さ約1.4m、高さ約0.5mを測る北東-南西方向4段積みの石積みである。小面の幅約10~35cm・厚さ約10~15cm、奥行き17~32cmの安山岩質川原石を使用し、北西を向いた小面には自然面を残す。それぞれの年代は不明だが、SD2、SA9、SA14とともに何らかの境界を示す施設と考えられる。SA9後方に位置しSA9上場よりも高い位置にあるが、同時性があるのかどうかは明らかに出来なかった。

SA9(第7図) B区中央付近で検出した長さ約2.5m、高さ約0.2mを測る北東-南西方向2段積みの石積みである。小面の幅約10~25cm・厚さ約10~13cm、奥行き13~22cmの安山岩質川原石を使用し、北西を向いた小面には自然面を残す。それぞれの年代は不明だが、SD2、SA8、SA14とともに何らかの境界を示す施設と考えられる。SA8前方に位置しSA8下場よりも低い位置にあるが、同時性があるのかどうかは明らかに出来なかった。

SA10(第4図) B区中央付近でSK3を縁取るように検出した北西-南東方向の列状集石で長さ約2.4mを測る。幅約10~25cm、長さ10~15cmの自然面を残した安山岩質川原石を使用する。

SA11(第7図) B区南東部で検出した長さ約2.0m、高さ約0.1mを測る北西-南東方向1段積みの石列である。小面の幅約20cm・厚さ約6~10cm、奥行き14~24cmの安山岩質川原石を使用し、南西を向いた小面には自然面を残す。

SA12(第7図) B区北西部のSK2底面付近で検出した長さ約1.45m、高さ約0.35mを測る北東-南西方向4段積みの石積みである。小面の幅約10~22cm・厚さ約7~18cm、奥行き20~23cmの安山岩質川原石を使用し、北西を向いた小面には自然面を残す。

SA13(第7図) B区中央北寄りで検出した列状集石で、SK7・SK8を縁取るように円弧を描き、長さ約2.6m、高さ約0.15mを測る。幅約5~15cm、長さ10~18cm、厚さ5~15cmの自然面を残した安山岩質川原石を使用している。

SA14(第7図) B区南西部の上層で検出した長さ約0.85m、高さ約0.2mを測る北東-南西方向2段積みの石積みで、高低差約0.2mの斜面に沿って積まれている。小面の幅約10~17cm・厚さ約7~11cm、奥行き10~17cmの安山岩質川原石を使用し、北西を向いた小面には自然面を残す。それぞれの年代は不明だが、SD2、SA8、SA9とともに何らかの境界を示す施設と考えられる。

SA15(第7図) C区北西部の最下層で検出した長さ約0.9mを測る北西-南東方向の列状集石である。幅約10~40cm、長さ15~35cmの安山岩質川原石を使用している。

SA16(第7図) C区北西部の最下層で検出した長さ約0.74m、高さ約0.3mを測る北西-南東方向2段積みの石積みである。小面の幅約20~35cm・厚さ約10~20cm、奥行き10~33cmの安山岩質川原石を使用し、北東を向いた小面には自然面を残す。

SA17(第7図) C区北西部の最下層で検出した長さ約0.71m、高さ約0.2mを測る北西-南東方向1段積みの石列である。小面の幅約15~20cm・厚さ約12~20cm、奥行き30~35cmの安山岩質川原石を使用し、北東を向いた小面には自然面を残す。

地下室・大形の土坑または落ち込み（SX）

SX1(第4・9図) B区南西角で検出した。調査区内では長さ約4m以上、幅約2m以上、深さ約0.4mの、北東面が直線的な土坑として検出しているが、北西部はSK2と重複し、南側は調査区外に遺構が続くため全体の平面形は不明である。SD1はSX1覆土の下層で検出され、SD2の覆土はSX1を覆っている。

SX2(第8図) C区南東端で検出した長さ約3.7m、幅約2.2m以上の矩形と推定される石積みの地下室で、南西部は調査区外に遺構が続いている。北西面に約86cm、北東面に約90cmの高さで石積み、南東面に1段約14～26cmの石段が4段、総高約1.0mが残る。土層断面からは室の深さがもともと約1.35m以上あったと考えられる。石積みは石面に自然面を残した川原石で、最下段に幅20～35cm、厚さ約10～15cmとやや大形の石を並べ、その上に大小粒が不揃いな石を乱積み気味に積み上げている。

SX3(第4図) C区北西部で検出した。推定直径約4mの範囲で底面が平坦な浅い落ち込みとなっている。

溝（SD）

SD1(第9図) B区南西部のSX1よりも下層で検出した。南東-北西方向最大5段積みの石組み溝で、長さ約2.7m以上、幅約0.58m、深さ約28cmを測る。

SD2(第9図) B区南端で検出した北東-南西方向最大3段積みの石組みの溝で、長さ2.7m以上、幅0.6m、深さ約33cmを測る。本遺構の覆土はSX1上に堆積する。

井戸（SE）

SE1(第9図) B区南東部で検出した。検出部の内径約0.6～0.7mの円形石組井戸で、内部は断ち割り時に深さ約2.2mまでを確認したが未完掘である。掘削最下部では内径0.95mと、上部が内傾気味に狭まっている。石積みは石面に自然面を残した川原石で、幅10～30cm、厚さ約10～20cm、長さ約20～30cmの大小粒が不揃いな石を乱積み気味に積み上げている。SE2と比較すると石材の粒が大きめで、小面の長軸を垂直方向に向けて積み、石積み断面も蛇行するなどやや稚拙さが感じられる。SK9を切って構築されている。

SE2(第9図) A区東端で検出した。検出部の内径約0.9mの円形石組井戸で、北東部は調査区外となっている。内部は断ち割り時に深さ約1.35mまでを確認したが未完掘である。石積みはほぼ垂直に積み上げられており、石面に自然面を残した川原石で、幅10～20cm、厚さ約5～15cmの大小粒が不揃いな石を乱積み気味に積み上げている。SK11はSE2の掘り方と考えられ、掘り方内には焼土が多く含まれる。

土坑（SK）

SK1(第10図) B区南西側の上層遺構として検出した。長径約2m、短径約1.3mの楕円形土坑で、深さ約0.6mを測る。SK2とSK3を切って掘削されている。

SK2・SK3(第10図) B区南西壁付近で検出した。SK2は長さ約4.5m以上、短さ約2.5m以上の推定隅丸長方形の土坑で、深さ約0.8m。南西部は調査区外にかかり、北西部はSK7により切られる。SK3は長さ約3m以上、幅約2.4m以上、深さ約0.8mの不整形な土坑で北西斜面がSK2の方向に下る断面階段状の形状となっているため、SK3を階段部とする素掘りの地下室とも捉えられるが、SK7・SK8・SX1と廃絶年代が近く、連続する区画溝のような遺構の可能性もある。上層にSK1が掘削される。

SK4(第10図) B区北東部で検出した。長径約1.4m、短径0.8m以上の推定楕円形土坑で、北東側は調査区外にかかる。深さ約1.8mを測る。

SK5(第10図) B区北東部で検出した。推定直径約1.7mの推定円形土坑。土坑の北側は調査区外にかかる。

深さ約1mを測る。

SK6(第10図) B区南東部で検出した。長さ約3m以上、幅約2.7m、深さ37cmを測る不整形な土坑。覆土中に炭化物を多く含む。

SK7(第4図) B区北西隅で検出した。調査区外に土坑がかかり、長さ約3m以上、幅約1.4m、深さ約0.3mを測る。SK8・SK2・SX1と廃絶年代が近く、連続する区画溝のような遺構の可能性はある。

SK8(第11図) B区北東部で検出した。調査区外に土坑がかかり、長径約3.2m、幅約2.7m以上、深さ約0.6mを測る。SK7・SK2・SX1と廃絶年代が近く、連続する区画溝のような遺構の可能性はある。

SK9(第9図) B区南西部で検出した。直径約2mの円形土坑で、深さ約0.8mを測る。南西部を切つてSE1が構築されており、SE1構築以前に埋められたと考えられる。

SK11(第9図) A区南東部で検出した。直径約4m以上の円形と推定される土坑で、深さ約1.3mまで掘削したが、さらに深くまで続く。SE2の掘り方と考えられ、覆土中に橙色の焼土を多く含む。

SK12(第4図) A区南東部で検出した。直径約0.85mの円形土坑で深さは約0.3mを測る。

SK13(第11図) A区中央北東壁付近で検出した。北東部は調査区外に土坑がかかるため平面形は不明。長径0.4m以上、短径0.1m以上、深さ約0.8mを測る。

SK14(第4図) A区中央北東壁付近で検出した。土坑の北東側が調査区外にかかるため全体の平面形は不明で、北西側はSK13により切られている。長径1m以上、短径0.8m以上、深さ約0.35mを測る。

SK15(第11図) A区北西部で検出した。土坑の北西側が調査区外にかかるが、概ね長径約1.85m、短径約1.2mの楕円形と推定される。深さは0.45mを測る。

SK16(第4図) C区北東部の南東壁付近で検出した。土坑の南東側が調査区外にかかるため平面形は不明。長径2.8m以上、短径1.2m以上、深さ約0.5mを測る。

SK17(第4図) C区北西壁付近で検出した。土坑の北西側が調査区外にかかるため平面形は不明。長径3.1m以上、短径0.7m以上、深さ約0.4mを測る。

SK18(第4図) C区北西角の壁付近で検出した。土坑の北西部が調査区外にかかるため平面形は不明。長径0.7m以上、短径0.6m以上、深さ約0.25mを測る。

SK19(第4図) C区北西部の東壁付近で検出した。土坑の東側が調査区外にかかるが、概ね長径約3m、短径約1.5m以上の楕円形土坑と推定される。測量時までに周囲を掘り下げてしまったため、残存していた深さは約4cmである。

SK20(第4図) C区北西部で検出した。SK19と重複する長径約1.5m、短径0.9m以上の楕円形土坑と推定される。深さ約0.3mを測る。

SK21(第4図) C区南東壁付近の上層で検出した近代以降の土坑。形状の記録無く不明。

ビット(SP)

SP1(第11図) B区中央付近で検出した。平面形は直径約0.9mのほぼ正円で、深さ約0.9mを測る。

SP2(第11図) B区中央東寄りで検出した。平面形は長径約0.8m、短径約0.6mの楕円で、深さ約0.5mを測る。

SP3(第4図) B区南東角付近で検出した。平面形は直径約0.6mのほぼ正円で、深さ約0.35mを測る。

SP4(第4図) B区南東角付近で検出した。平面形は長径約0.7m以上、短径約0.45m以上の推定楕円で東側は遺構が調査区外へと続く。深さ約0.3mを測る。

(3) 遺物

(第12図)

SA4 構築面下の整地層から肥前陶器の薬灰釉を施した三足付の向付 (1)、肥前陶器灰釉砂目皿 (2)、I 1 類の在地系手捏ね土師器皿 (3) が出土した。SA5 前面の覆土からは I 1 類の在地系手捏ね土師器皿 (4) が出土した。これらは 17 世紀前半代の遺物群であるが、SA4 の構築年代を直接示すものではなく、その下層の SK7 の廃絶年代の下限を示すものと考えられる。SA4 の構築年代は横目地を揃え石面加工が顕著な石積みの特徴から、19 世紀前半以降であると考えられる。

SA9 前面の覆土からは肥前陶器灰釉砂目皿 (5) と I 1 類の在地系手捏ね土師器皿 (6) が出土した。17 世紀前半代に位置づけられ、SA9 の廃絶年代の下限を示す。

SX1 内覆土の最下層からは中国磁器の呉須赤絵瓶 (7)、越中瀬戸陶器天目形碗 (8)、外底部にムシロ痕が残る I 1 類の在地系手捏ね土師器皿 (9) が出土した。SX1 内北西寄りではいぶし瓦がまとまって出土したためその周辺の遺物を瓦溜まりとして取り上げた。ここからはやや薄手の肥前磁器碗 (10)、被熱痕と漆継ぎが残る中国磁器皿 (11)、被熱痕が残る肥前磁器皿 (12)、在地産焼塩壺蓋 (13)、I 3 類の在地系手捏ね土師器皿 (14) が出土した。SX1 内の瓦溜まりの上層で確認された砂利層からはいわゆる絵唐津の肥前陶器鉄絵向付 (15) が出土した。SX1 粗砂層からは中国磁器小杯 (16)、肥前磁器碗 (17～20)、肥前磁器皿 (21)、肥前陶器灰釉砂目溝縁皿 (22・23)、肥前陶器すり鉢 (24)、I 1 類 (25)・I 3 類 (26)・IV2 類 (27)・IV1 類 (28) の在地系手捏ね土師器皿が出土した。これら SX1 出土遺物は 17 世紀前半～中頃に位置づけられるものが多いが、17・27・28 など 17 世紀後半代の遺物が混入する。

(第13図)

SX2 からは肥前陶器胎土目鉄絵皿 (1)、建水かと思われる越中瀬戸陶器 (2)、越前陶器すり鉢 (3)、I 3 類 (4)・Ⅲ類 (5) の在地系手捏ね土師器皿が出土した。17 世紀前半代に位置づけられる。

SX3 下層からは、内面鏡文の肥前磁器青磁皿 (6)、越中瀬戸陶器碗 (7)、肥前陶器灰釉胎土目皿 (8)、口唇部の欠けが多い美濃陶器長石釉皿 (9)、いわゆる絵唐津の肥前陶器鉄絵向付 (10)、萐苣底の肥前陶器すり鉢 (11)、肥前陶器香炉 (12)、I 1 類の在地系手捏ね土師器皿 (13・14)、外面全面に油痕が付着するⅢ類の在地系手捏ね土師器皿 (15)、Ⅱ類の在地系手捏ね土師器皿 (16) が出土した。17 世紀前半代の遺物群に位置づけられる。

SX3 上層からは肥前磁器ミニチュア碗 (17)、瀬戸磁器型打皿 (18) が出土した。19 世紀中頃までの遺物群に位置づけられる。

SD1 の石積裏込部分からは、肥前陶器碗 (19)、肥前陶器すり鉢 (21)、I 1 類の在地系手捏ね土師器皿 (22) が出土した。20 は SD1 直上に堆積し、SD1 検出時に除去した土から出土した肥前陶器灰釉砂目溝縁皿である。これらのことから SD1 は 17 世紀前半代に構築され間もなく廃絶されたと考えられる。

(第14図)

SE1 石積構築時の掘り方からは肥前磁器小杯 (1)、I 3 類の在地系手捏ね土師器皿 (2) が出土した。SE1 内覆土のうち掘削した部分の下層にみられた炭層からは中国産の可能性のある磁器小杯 (3)、肥前磁器型打輪花皿 (4)、肥前磁器青磁鉢 (5)、美濃陶器青織部向付 (6)、I 3 類の在地系手捏ね土師器皿 (7～10) が出土した。これらのことから SE1 は 17 世紀前半代に構築され、間もなく廃絶されたと考えられる。12 は SE1 内の上層に混入したと考えられる九谷磁器皿で、内面に赤・金で色絵が施されて赤字で文字がみえ、上絵付け焼成時に使用した色見と考えられる。

SK1 からは丸形 (17) と口縁が直立する腰張形 (18・19) の肥前磁器碗、薄手で高台断面が逆三角形の肥前磁器皿 (20・21)、肥前陶器銅緑釉見込蛇目釉刺皿 (22)、波緑 (23) と丸形内壳 (24) の越中瀬戸陶器皿、肥前陶器鉄釉すり鉢 (25) が出土した。また、九谷焼の上絵窯関連遺物として、煉瓦 (26・27) や窯道具と思われる土製品 (28)、朱色に金色で記号のような文様が書かれた上絵色見と考えられる九谷磁器の碗皿小片 (29～31) が出土した。近代にかけての遺物群に位置づけられる。

(第 15 図)

SK2 最下層からは肥前磁器の丸形小杯 (1)、肥前陶器鉄釉天目碗 (2)、I 1 類 (4・5)・I 3 類 (3) の在地系手捏ね土師器皿が出土した。SK2 中層南側からは肥前磁器丸形碗 (6) や高台径の小さな肥前磁器皿 (7)、長石釉・鉄釉掛分の瀬戸美濃陶器碗 (8)、産地不明の陶器鉄釉碗 (9)、I 3 類在地系手捏ね土師器皿 (10・11) が出土した。SK2 上層からはコップ形焼塩壺 (12)、IV 1 類在地系手捏ね土師器皿 (13) が出土した。

SK2 内 SA12 前面からは肥前陶器灰釉碗 (14)、肥前陶器灰釉瓶 (15)、I 1 類在地系手捏ね土師器皿 (16) が出土した。SK2 からは中国磁器の青花碗 (17) と明山手青花鉢 (18)、北九州系陶器碗 (19)、丸形の越中瀬戸陶器鉄釉碗 (20)、平底の肥前陶器灰釉小杯 (21)、瀬戸美濃陶器灰釉皿 (22)、は肥前陶器の灰釉砂目溝縁皿 (23・24)、内外面に透明釉を掛け鉄釉で施文した肥前陶器建水または鉢 (25)、越中瀬戸陶器すり鉢 (26)、口縁を鉄釉に漬けた肥前陶器すり鉢 (27)、I 1 類 (28)・II 類 (31)・III 類 (30)・IV 3 類 (29) の在地系手捏ね土師器皿が出土した。28 には一部に金箔が残存しており、内外面に金箔貼りであったと考えられる。SK2 出土遺物は概ね 17 世紀中頃までに位置づけられるが、中層以上の出土遺物には後世の遺物の混入が見られる。

(第 16 図)

SK4 からは九谷磁器馬上杯 (1)、産地不明瓦質土器皿 (2) が出土した。近代までの遺物群に位置づけられる。

SK5 からは肥前陶器灰釉砂目皿 (3)、常滑産と考えられる陶器甕 (4)、越前陶器すり鉢 (5)、I 1 類在地系手捏ね土師器皿 (6) が出土した。17 世紀前半の遺物群である。

SK6 下層からは半球形の肥前磁器小杯 (7)、肥前陶胎染付碗 (8)、肥前陶器すり鉢 (9・10)、I 1 類 (11)・IV 1 類 (15)、IV 2 類 (13・17)、IV 3 類 (16)、V 類 (12・14・18) の在地系手捏ね土師器皿が出土した。SK6 南側上層からは IV 3 類 (19)・IV 4 類 (20)・V 1 類 (21・22) の在地系手捏ね土師器皿が出土した。

(第 17 図)

SK6 上層からは腰張形で高台断面が逆三角形の肥前磁器碗 (1)、透明釉と鉄釉を掛分けた天目形の肥前磁器碗 (2)、沢瀉文の葉脈を墨弾き技法で白抜きした丸形の肥前磁器皿 (3)、菊形に型打ちした肥前磁器皿 (4)、中国磁器の芙蓉手青花鉢 (5)、内外面白泥刷毛目を施した肥前陶器碗 (6)、IV 4 類 (9)・V 2 類 (7・8) の在地系手捏ね土師器皿、鉾澤に溶着した土師器皿片 (10) が出土した。また、11 は土師器壺である。

SK6 東側上層からは玉縁で体部が直線的に開く肥前陶器鉄釉すり鉢 (12) が出土した。これらのことから SK6 出土遺物は 18 世紀前半代までに位置づけられる。

SK8 からは中国磁器漳州窯系と考えられる青花角皿 (13)、体部外面に櫛目波状文を刻んだ越中瀬戸陶器灰釉香炉 (14) が出土した。14 は被熱している。SK8 上層からは I 1 類 (15) と III 類 (16) の在地系手捏ね土師器皿が出土した。SK8 出土遺物は 17 世紀前半代に位置づけられる。

SK16 からは須佐陶器灰釉片口鉢 (17) が出土した。19 世紀前半代までに位置づけられる。

SK17からは肥前陶器すり鉢(18)、色見の可能性のある九谷磁器鉢(19)が出土した。近代までの遺物群に位置づけられる。

(第18図)

SK7最下層からは中国磁器青花碗(1)と青花皿(2)、型打成形の肥前磁器染付皿(3)、越中瀬戸陶器の碗(4)とすり鉢(7)、肥前陶器の胎土目皿(5)と砂目皿(6)、鉢型(8)、ⅠⅠ類(10・11)とⅢ類(9)の在地系手捏ね土師器皿が出土した。SK7出土遺物は17世紀前半代に位置づけられる。

SK13からは腰張形の肥前磁器碗(12・13)、肥前磁器皿(14)、肥前磁器小杯(15)、肥前陶器刷毛目碗(16)、肥前陶器器手碗(17)、須佐陶器鉄泥すり鉢(18)、ⅤⅠ類(20)・ⅤⅣ類(19)の在地系手捏ね土師器皿が出土した。17世紀末～18世紀前半にかけての遺物群と位置づけられる。

SK21からは肥前磁器碗(21)、底部中心に孔があく産地不明磁器製品(22)が出土した。近代までの遺物群に位置づけられる。

(第19図)

SK11からは中国磁器青花碗(2)、肥前磁器の丸形碗(1・3)、肥前磁器小杯(4)、肥前磁器皿(5)、鉄釉天目形(6)・越中瀬戸陶器の灰釉丸形碗(9)、美濃陶器長石釉碗(7)、肥前陶器灰釉碗(8)、肥前陶器灰釉皿(10)、美濃陶器長石釉皿(11)、肥前陶器鉄絵四方向付(12)、信楽陶器壺(13)、越中瀬戸陶器天目台(灯火具の可能性もある)(14)、在地系手捏ね土師器皿(15～23)が出土した。15～17・21・22はⅠⅠ類、20はⅠⅢ類、18はⅡ類であろう。17世紀前半代に位置づけられる。

SP1からは肥前磁器壺蓋(24)、京・信楽系陶器碗(25)、ⅣⅣ類の在地系手捏ね土師器皿(26)が出土した。17世紀末頃の遺物群に位置づけられる。

SP2からはⅣⅢ類の在地系土師器皿(27)が出土した。17世紀後半代に位置づけられる。

B区第3層からは越中瀬戸陶器すり鉢(28)が出土した。B区第2層下黄砂からは高台に礫が付着する肥前磁器皿(29)、筒形の肥前磁器碗(30)、越中瀬戸陶器皿(31)が出土した。B区第2層黄砂からは上絵色見と考えられる九谷磁器皿(32)が出土した。

(第20図)

A区第1層からは内外面に格子目叩き痕が残る肥前陶器鉄釉甕(1)、信楽陶器壺(2)、北陸系陶器すり鉢(3)が出土した。

(第21図)

B区第1層からは肥前陶器片口鉢(1)、肥前磁器紅皿(2)、上絵色見と考えられる九谷磁器片(3～11)、内面・外底部・割口に赤色顔料が付着する京・信楽系陶器の容器(12)が出土した。B区最下層からは瀬戸美濃陶器長石釉皿(13)が出土した。C区下層からは肥前磁器碗(14)が出土した。A区上層からは型打成形した肥前磁器色絵鉢(15)、在地系土器の乗燭(16)、上絵色見と推定される九谷磁器鉢(17)が出土した。B区整地層の土層セクション畦からは備前系陶器のすり鉢(18)が出土した。B区SB1土台の下層からは肥前磁器青磁皿(19)、肥前陶器灰釉砂目溝縁皿(20)が出土した。B区SB1土台下層からは肥前磁器皿(21)と上絵色見と推定される九谷磁器片(22～24)が出土した。

(第 22 図)

1 ～ 8 は石製品で、2 は茶臼の受皿部である。9 ～ 16 は銭貨で 14 は判読不明、その他は寛永通寶で 9・11 ～ 13 は古寛永、10 は波銭の四文銭である。17 ～ 32 は金属製品で、17 ～ 26 は煙管、27・28 は折頭釘、29・30 は矢立の墨壺とその蓋である。31 は火箸である。

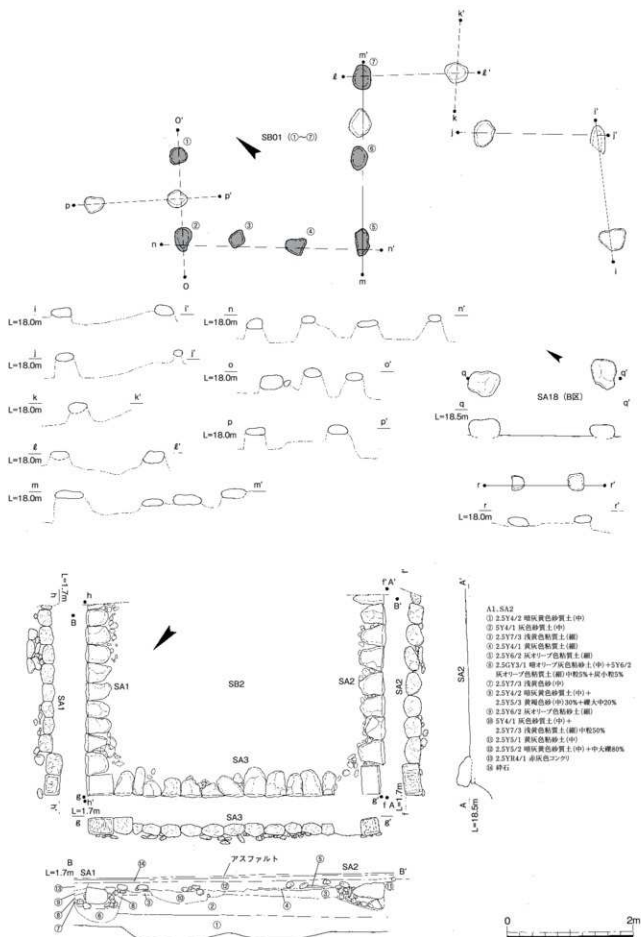
(第 23 ～ 29 図)

出土した瓦の一部を掲載した。第 6 表に釉薬・形態等種類毎に計測した重量を示した。

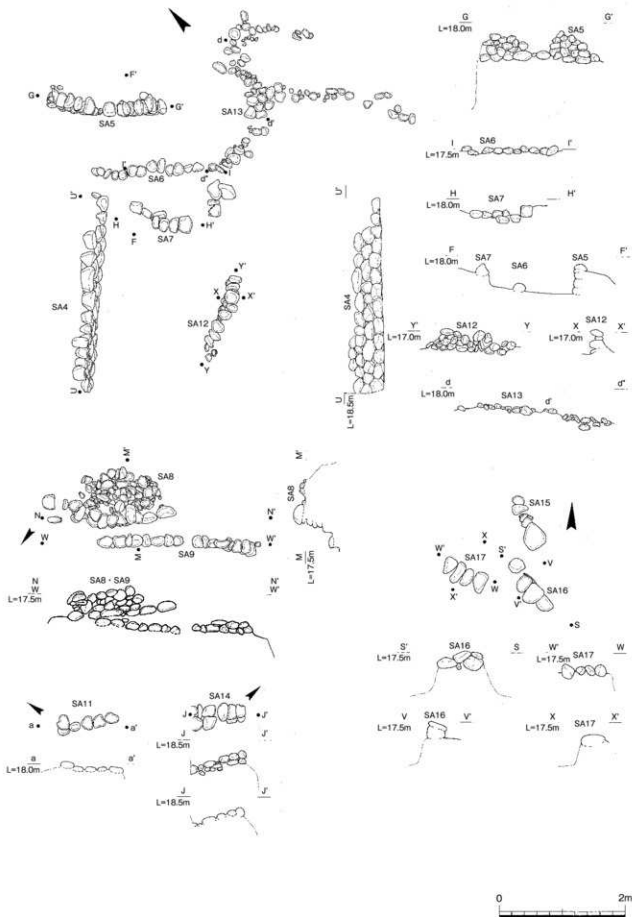
(掲載外の遺構について出土遺物が示す廃絶年代)

SK3 は 17 世紀前半代、SK9 は 17 世紀前半～中頃、SK14 は 18 世紀以降、SK15 は 17 世紀代、SK19・

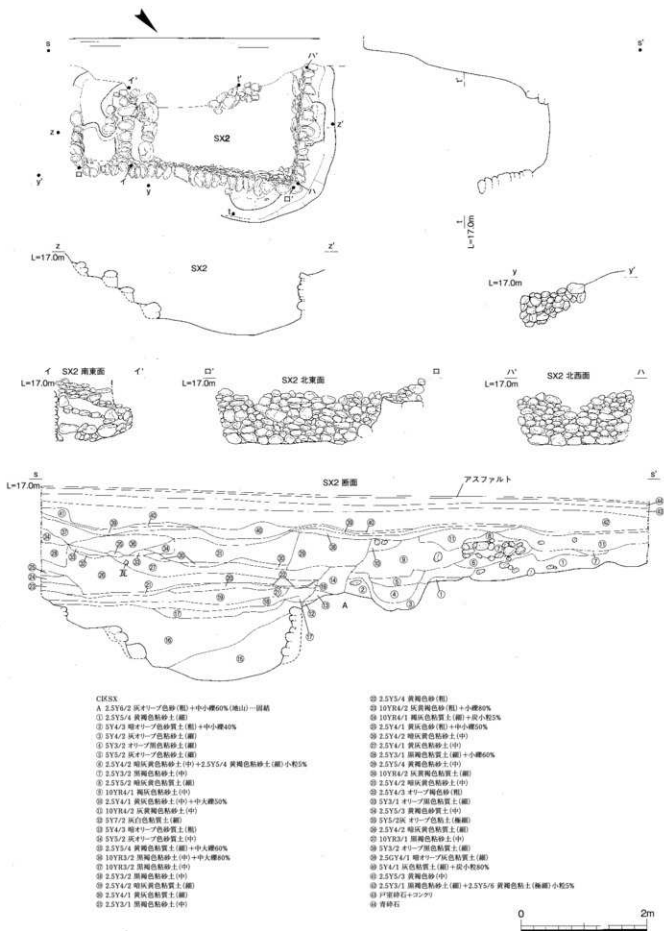
SK20 は近代、SP3 は 17 世紀前半～中頃に埋められて廃絶されたと考えられる。SA12 の構築年代は裏込出土遺物から 17 世紀後半代と考えられる。



第6図 B区石列 (SB・SA) 平面図 (S=1/60)



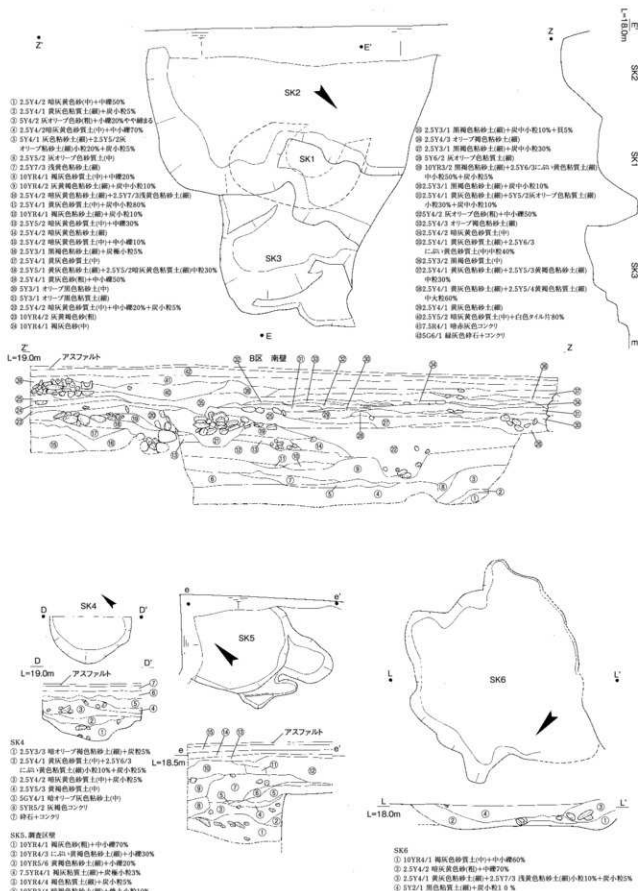
第7图 B区石列 (SA) 平面图 (S=1/60)



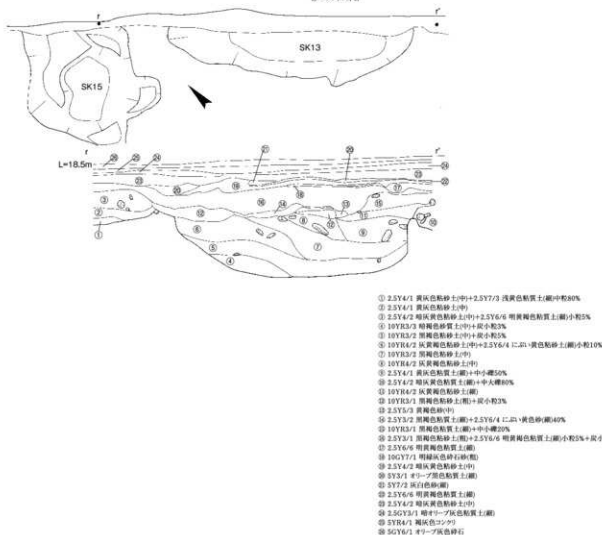
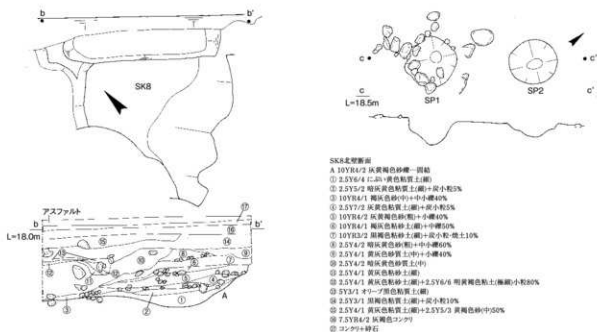
第8図 C区SX2 平・断面図 (S=1/60)



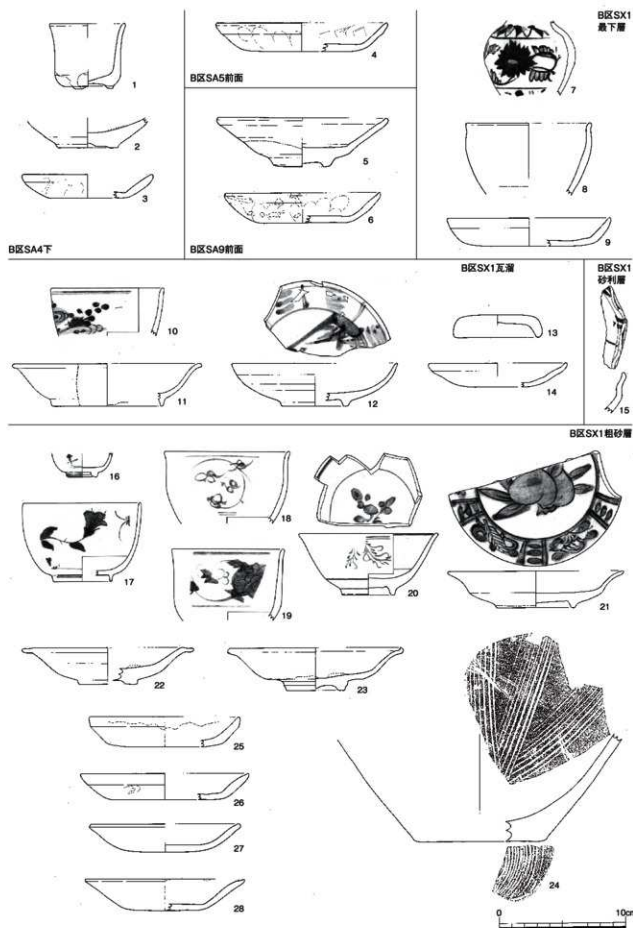
-18-



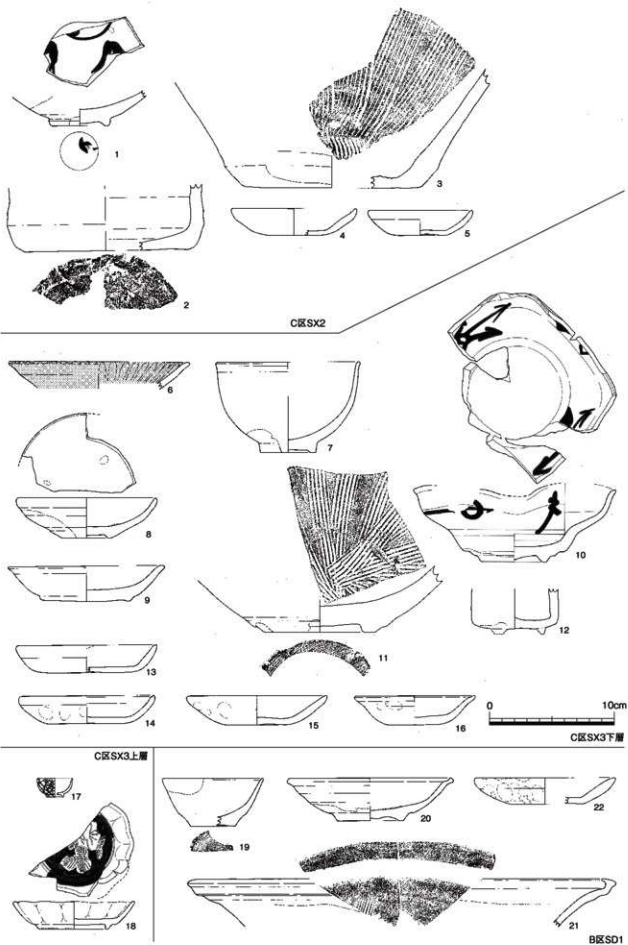
第10図 B区 南壁, SK、平断面図 (S=1/60)



第11図 A・B区 SK・SP断面図 (S=1/60)

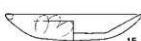
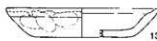
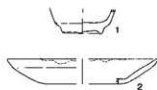


第12図 SA4下、SA6-SA7上、SA5前面、SA9前面、SX1最下層、SX1瓦溜、SX1砂利層、SX1粗砂層 出土陶磁器・土器 (S=1/3)

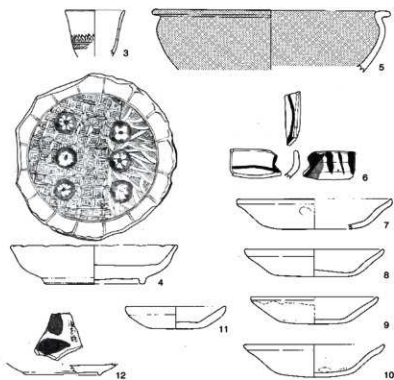


第13图 SX2、SX3下層、SX3上層、SD1 出土陶磁器・土器 (S=1/3)

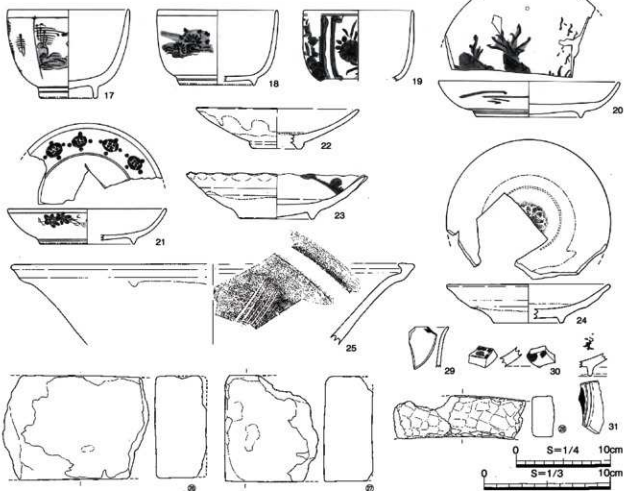
B区SE1掘方



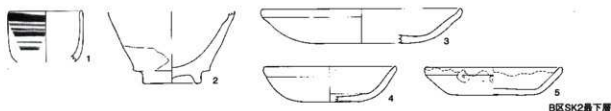
B区SK3



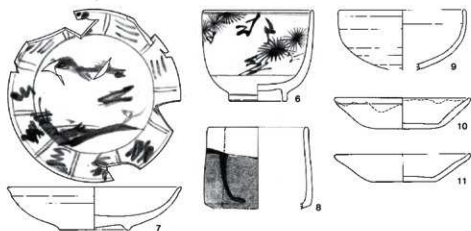
B区SK1



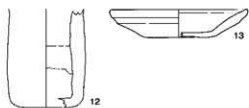
第14図 SE1掘方、SE1内下炭層、SE1内上層、SK3、SK1出土陶磁器・土器 (S=1/3、○数字はS=1/4)



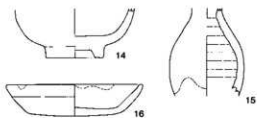
B区SK2最下層



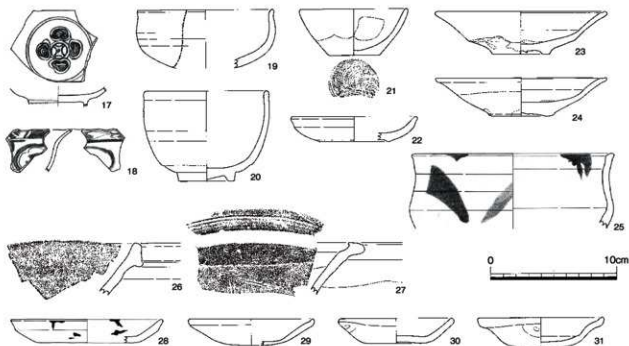
B区SK2中層南



B区SK2上層



B区SK2SA12前面

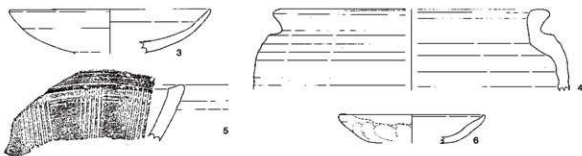


B区SK2

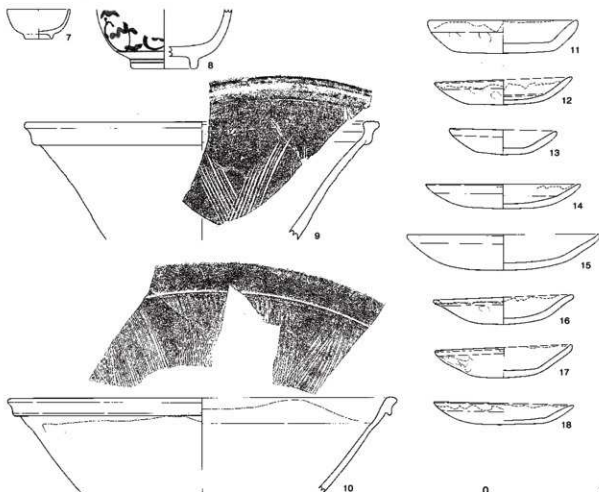
第15図 SK2最下層、SK2中層南、SK2上層、SK2SA12前面、SK2出土陶磁器・土器 (S=1/3)



B区SK4



B区SK5

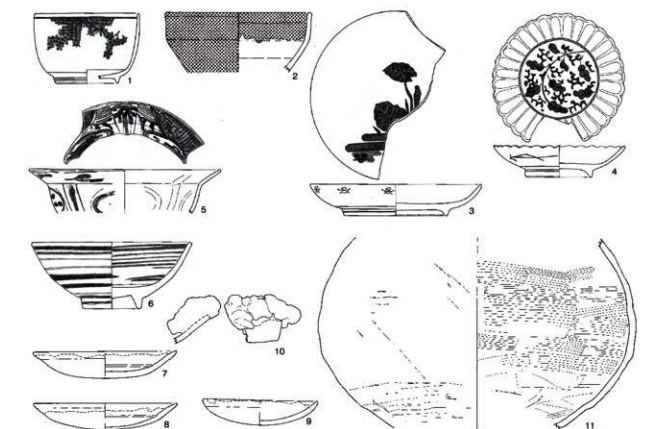


B区SK6下層



B区SK6南側上層

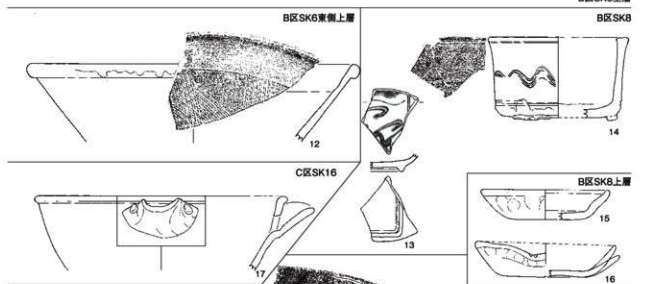
第16図 SK4、SK5、SK6下層、SK6南側上層出土陶磁器・土器 (S=1/3)



B区SK6上層

B区SK8

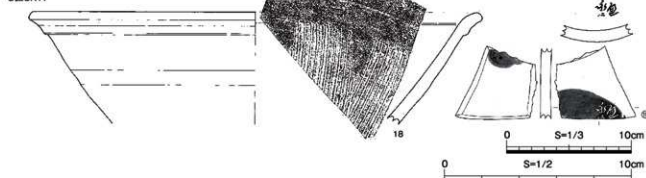
B区SK6東側上層



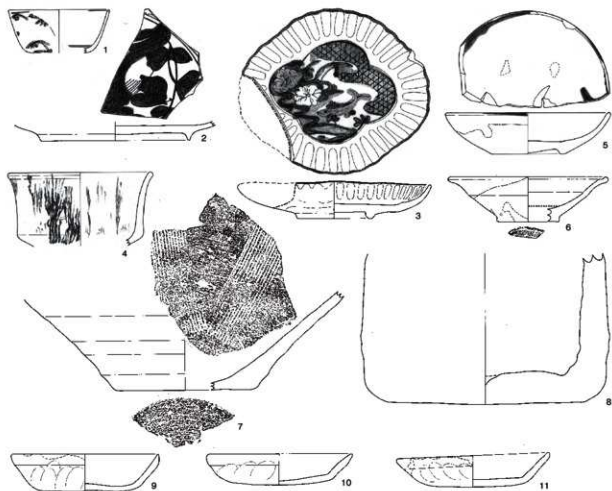
C区SK16

B区SK8上層

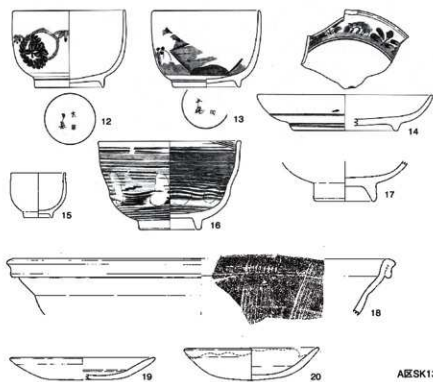
C区SK17



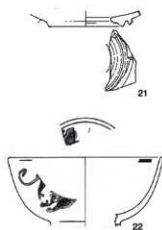
第17図 SK6上層、SK6東側上層、SK8、SK8上層、SK16、SK17出土陶磁器・土器 (S=1/3、○数字はS=1/2)



B区SK7最下層



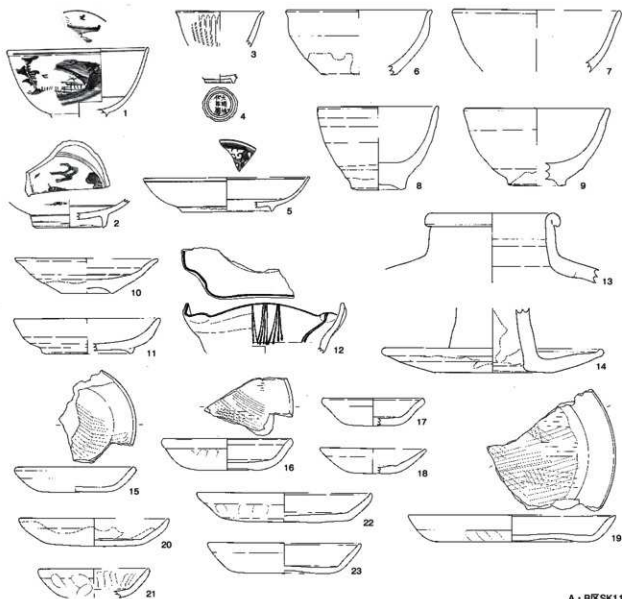
A区SK13



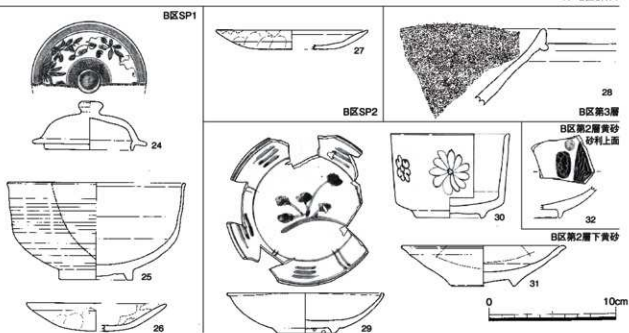
C区SK21



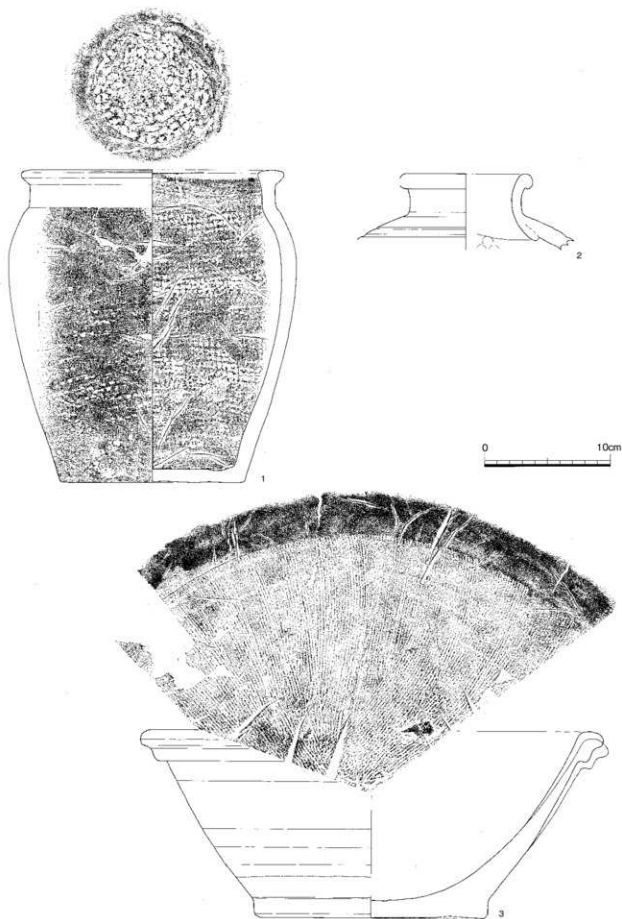
第18図 SK7最下層、SK13、SK21出土陶磁器・土器 (S=1/3)



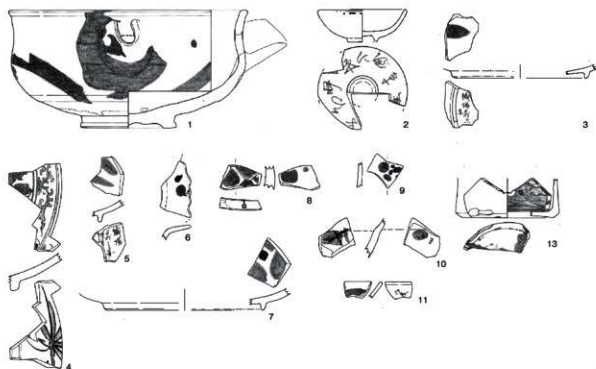
A · B区SK11



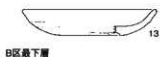
第19图 SK11、SP1、SP2、B区第3層、B区第2層下黄砂、B区第2層黄砂砂利上面 出土陶磁器·土器 (S=1/3)



第20图 A区第1层 出土陶器 (S=1/3)



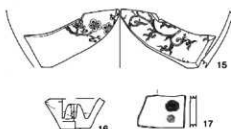
B区第1層



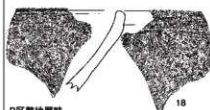
B区最下層



C区下層

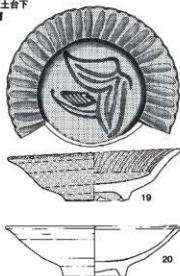


A区上層

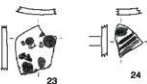
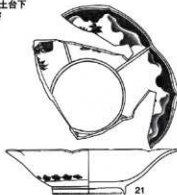


B区雙地層哇

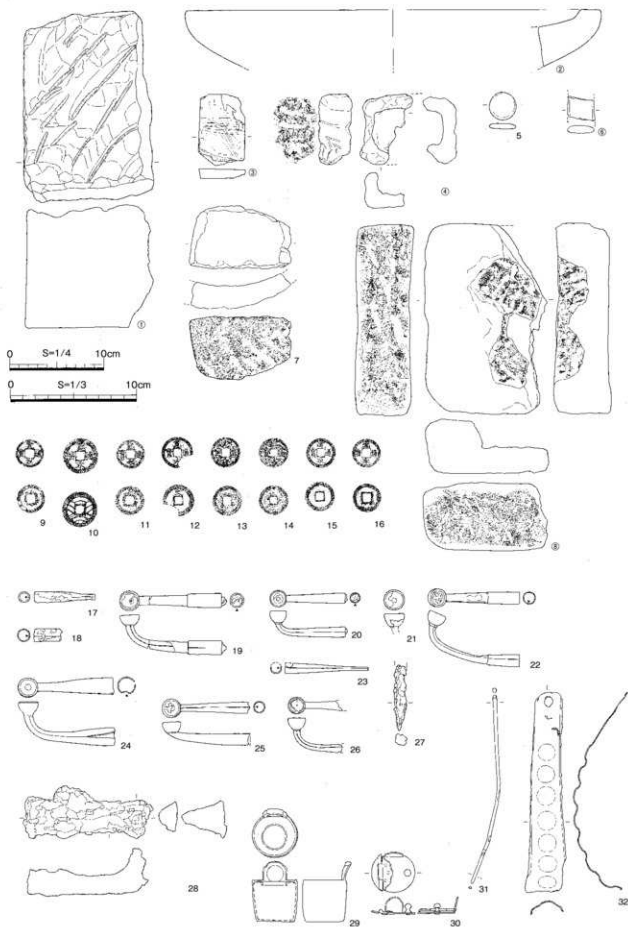
B区土台下層



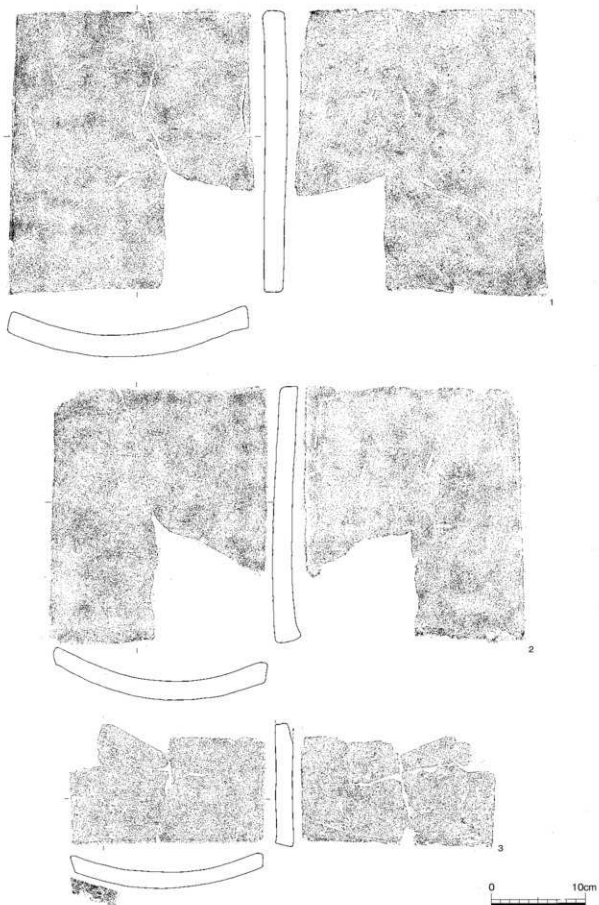
B区土台上下層



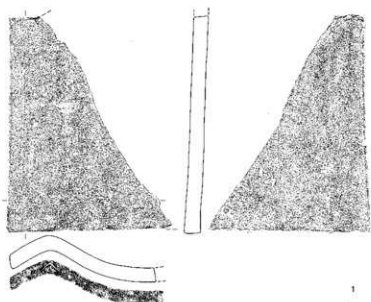
第21圖 B区第1層、B区最下層、C区下層、A区上層、B区土台上下層・上層、B区雙地層哇出土陶磁器・土器 (S=1/3)



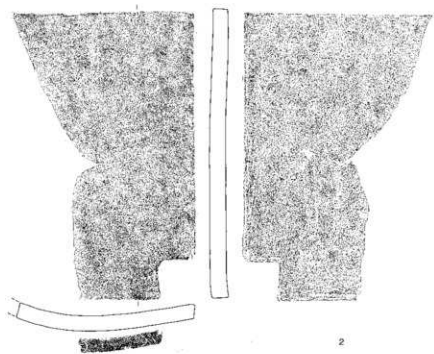
第22図 石製品 (S=1/3、○数字はS=1/4)、銭 (S=1/3)、金属製品 (S=1/3)



第23图 SE1、B区第2層下瓦漏出土瓦 (S=1/4)



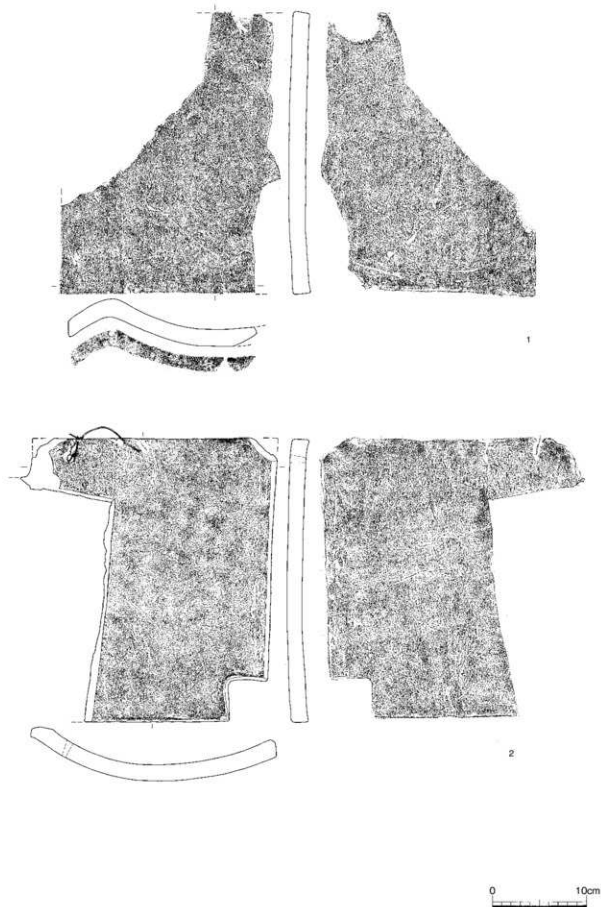
1



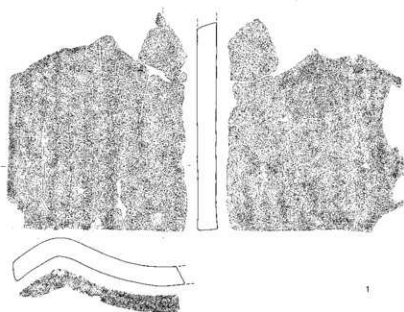
2



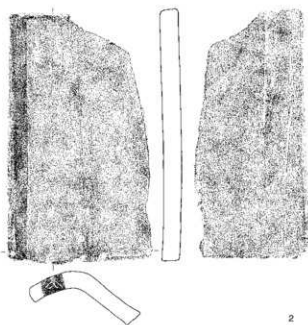
第24图 A区第1層出土瓦 (S=1/4)



第25图 A区第1层出土瓦 (S=1/4)



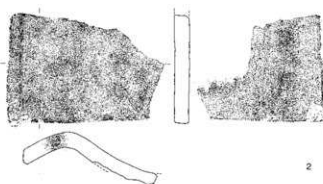
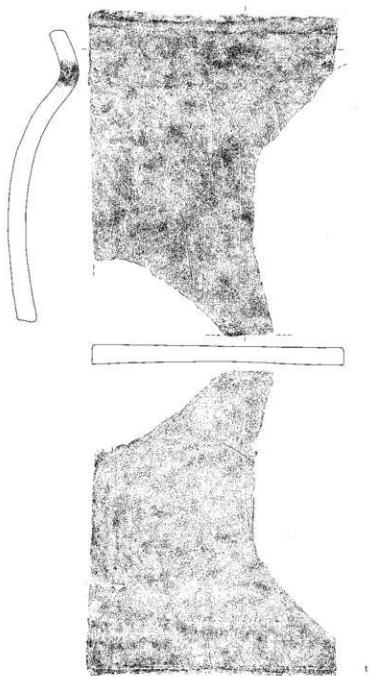
1



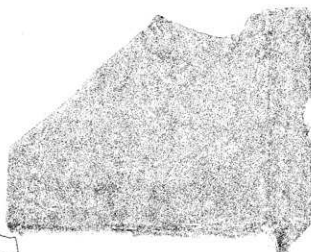
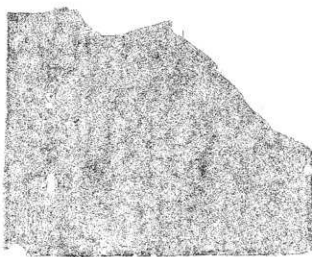
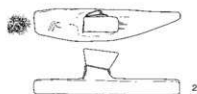
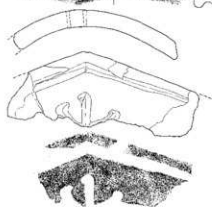
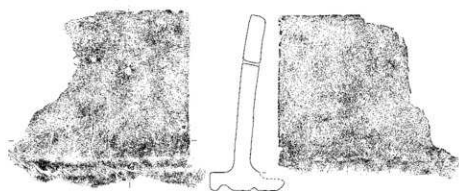
2



第26图 A区第1層、C区上層出土瓦 (S=1/4)



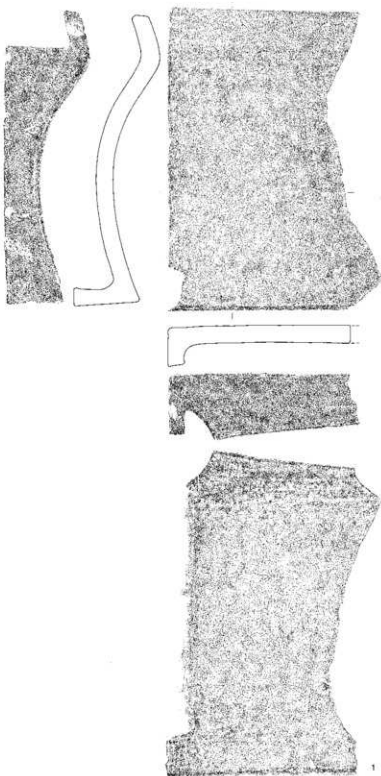
第27图 C区上層出土瓦 (S=1/4)



3

0 10cm

第28图 C区上層出土瓦 (S=1/4)



第29图 C区上層出土瓦 (S=1/4)

第1表 陶磁器・土器観察表

図版番号	番号	地区	遺構	遺構位置	材料	形状	法量a 法量b	法量c 法量d	遺存	輪郭線	胎土 色澤	所在地	備考	実測 番号
12	1	D	S44下 S45・ S47上	向付 陶器	-	6.0 4.0	5.2 -	口 3/12	底 12/12	黒灰釉 -	5Y8/1 灰白	肥前	足1段	X33
12	2	B	S44下 S46・ S47上	黒 陶器	-	4.8	-	底 12/12	底 12/12	灰釉	7.5Y8/3 にぶい	肥前	足込砂目1段	X31
12	3	H	S44下 S46・ S47上	十餘器皿 土器	10.4 内6.2	1.9 -	口 2/12	口 2/12	口 2/12	10Y8/4 にぶい黄緑	在地			X32
12	4	D	S45 前面	土師器皿 土器	13.6 内9.6	2.3 -	口 2/12	口 2/12	口 2/12	10Y8/4 にぶい黄緑	在地			X34
12	5	D	S49 前面	黒 陶器	13.6 4.8	3.9 -	口 2/12	口 2/12	口 2/12	灰釉 -	2.5Y8/6 明赤地	肥前	足込砂目1段、 高台砂目2段	X36
12	6	D	S49 前面	土師器皿 土器	12.4 内8.0	2.4 -	口 3/12	口 3/12	口 3/12	10Y8/3 浅黄緑	在地		底底2段	X35
12	7	D	SX1 最下層	鉄 砂層	-	7.2	7.2	底 5/12	底 5/12	透明釉 染付・色絵(朱・薄緑)	9/ 白	中国		T41
12	8	D	SX1 最下層	陶 砂層	10.0 -	-	口 2/12	口 2/12	口 2/12	鉄釉 -	2.5Y8/3 浅黄	越中瀬戸		T39
12	9	D	SX1 粗砂層	土師器皿 土器	13.0 内9.4	2.3 -	口 1/12	口 1/12	口 1/12	2.5Y8/2 灰白	在地		外底部2段	T38
12	10	D	SX1 丸層	陶 砂層	9.0 -	-	口 4/12	口 4/12	口 4/12	透明釉 染付	9/ 白	肥前		T37
12	11	D	SX1 丸層	黒 陶器	15.0 8.8	3.4 -	口 1/12	口 1/12	口 1/12	透明釉 染付	9/ 白	中国	漆碗、高台舞 盤、被熱	T36
12	12	D	SX1 丸層	黒 陶器	13.2 5.4	3.4 -	口 3/12	口 3/12	口 3/12	透明釉 染付	9/ 白	肥前	高台砂付器、被 熱	T35
12	13	D	SX1 丸層	焼返黄蓋 土器	7.0 -	1.8 -	口 3/12	口 3/12	口 3/12	2.5Y8/6 黄	在地			T33
12	14	D	SX1 丸層	十餘器皿 土器	11.0 内5.0	1.9 -	口 1/12	口 1/12	口 1/12	7.5Y8/3 浅黄緑	在地			T34
12	15	D	SX1 砂利層	向付 陶器	-	-	口 2/12	口 2/12	口 2/12	透明釉 砂絵	5Y6/1 灰	肥前	底滑澤	T40
12	16	B	SX1 粗砂層	小杯 陶器	2.4 -	-	底 9/12	底 9/12	底 9/12	透明釉 染付	9/ 白	中国		T42
12	17	D	SX1 粗砂層	陶 砂層	9.4 4.6	6.3 -	口 3/12	口 3/12	口 3/12	透明釉 染付	5Y8/1 灰白	肥前	高台内一面直 線、内外面黄入	T43
12	18	D	SX1 粗砂層	陶 砂層	10.0 -	-	口 2/12	口 2/12	口 2/12	透明釉 染付	5Y8/1 灰白	肥前		T45
12	19	D	SX1 粗砂層	陶 砂層	9.0 -	-	口 3/12	口 3/12	口 3/12	透明釉 染付	9/ 白	肥前		T44
12	20	D	SX1 粗砂層	陶 砂層	11.0 4.2	4.9 -	口 7/12	口 7/12	口 7/12	透明釉 染付	9/ 白	肥前	高台・見込砂付 器	T46
12	21	D	SX1 粗砂層	黒 陶器	14.0 6.2	2.9 -	口 3/12	口 3/12	口 3/12	透明釉 染付	9/ 白	肥前	高台砂付器、内 外面黄入	T47
12	22	D	SX1 粗砂層	黒 陶器	13.6 4.6	2.9 -	口 1/12	口 1/12	口 1/12	灰釉 -	5Y7/1 灰白	肥前	見込砂目2段、 高台砂目1段	T49
12	23	D	SX1 粗砂層	黒 陶器	14.0 4.6	3.4 -	口 2/12	口 2/12	口 2/12	灰釉 -	5Y7/1 灰白	肥前	見込、高台砂目 各3段	T48
12	24	D	SX1 粗砂層	ナリ鉢 陶器	10.6 -	-	底 2/12	底 2/12	底 2/12	2.5Y8/6 黄	肥前			T50
12	25	D	SX1 粗砂層	土師器皿 土器	12.0 内7.6	2.4 -	口 2/12	口 2/12	口 2/12	10Y8/4 浅黄緑	在地		底部2/12以上	T52
12	26	D	SX1 粗砂層	十餘器皿 土器	13.4 内8.8	2.1 -	口 2/12	口 2/12	口 2/12	10Y8/4 浅黄緑	在地			T51
12	27	D	SX1 粗砂層	十餘器皿 土器	12.0 内6.4	2.3 -	口 1/12	口 1/12	口 1/12	10Y8/4 浅黄緑	在地			T53
12	28	D	SX1 粗砂層	土師器皿 土器	12.6 内8.0	2.5 -	口 1/12	口 1/12	口 1/12	10Y8/3 にぶい黄緑	在地		底底2段	T54
13	1	C	SE2内	黒 陶器	-	4.6	-	底 12/12	底 12/12	透明釉 染付	7.5Y8/1 にぶい	肥前	高台内黄入、見 込砂目1段、 底成不具	E24
13	2	C	SE2	煙水か 陶器	-	13.2	-	底 4/12	底 4/12	鉄釉 -	2.5Y7/1 灰白	越中瀬戸		E28
13	3	C	SE2内	ナリ鉢 陶器	-	14.0	-	底 2/12	底 2/12	10Y8/4 浅黄緑	越前		外面底部施2 し系	E23
13	4	C	SE2内	上鉢器皿 土器	10.0 内5.2	2.1 -	口 3/12	口 3/12	口 3/12	10Y8/6 黄緑	在地			E21

国庫番号	番分	区域区	建物種別	部 屋 名	土師器土器 数量(口)	土師c 土師器	漆 倉	結果 取付	絵土 色値	座地	備 考	宝暦 番号
13	5	C	SK2内	土師器土 上層	8.4 内4.1	2.0 -	口 3/12	-	7.5YR7/6 緑	在地		E22
13	6	C	SK3 下層	土師器 上層	14.4 -	- -	口 2/12	青磁輪	K8 灰白	肥前	内外両面入	E37
13	7	C	SK3 下層	土師器 上層	11.4 4.1	7.2 -	底 12/12	鉄軸 -	10YR7/2 にぶい黄褐色	越中瀬戸		E36
13	8	C	SK3 下層	土師器 上層	11.2 3.8	3.2 -	底 6/12	灰軸	7.5YR/4 にぶい黄	肥前	見込粘土目2段	E28
13	9	C	SK3 下層	土師器 上層	12.1 7.0	2.8 -	底 8/12	長石軸 -	2.5YR/2 灰白	美濃	口唇欠けが多い	E3
13	10	C	SK3 下層	向付 陶器	5.0 -	6.0 -	底 11/12	透明軸 鉄結	2.5Y7/1 灰白	肥前	SK3と接合	E38
13	11	C	SK3 下層	すり鉢 陶器	- 9.0	- -	底 5/12	-	5YR5/3 にぶい赤褐色	肥前	茶碗底、見込・ 高台跡上日曜香 2段	E29
13	12	C	SK3 下層	青伊 陶器	6.9 -	3.5 -	底 2/12	灰軸 -	7/ 灰白	肥前	外面異入	E35
13	13	C	SK3 下層	土師器土 上層	11.2 内7.8	2.2 -	底 3/12	-	10YR7/3 にぶい黄褐色	在地	痕跡以上、内 外面剥離	F30
13	14	C	SK3 下層	土師器土 上層	10.8 内6.4	2.2 -	底 2/12	-	10YR8/2 灰黄褐	在地		E33
13	15	C	SK3 下層	土師器土 上層	11.2 内5.6	2.3 -	口 5/12	-	10YR8/3 改黄褐	在地	外面全面剥離	F32
13	16	C	SK3 下層	土師器土 上層	9.6 内5.2	2.3 -	口 3/12	-	7.5YR7/6 緑	在地		E31
13	17	C	SK3 上層	土師器土 上層	2.8 1.4	1.6 -	口 6/12	透明軸 金付	9/ 白	肥前		E25
13	18	C	SK3 上層	土師器土 上層	9.6 5.6	2.2 -	口 6/12	透明軸 金付	9/ 白	瀬戸	型打、繪花12弁	E27
13	19	B	SD01 表込	土師器 上層	8.0 3.6	3.8 -	口 3/12	灰軸 -	N7/1 灰白	肥前		X29
13	20	B	SD輸出土	土師器 上層	13.2 5.4	3.4 -	口 4/12	灰軸 -	7.5YR5/4 にぶい黄	肥前	見込・高台跡目 各3段	X26
13	21	B	SD01 表込	すり鉢 陶器	34.0 -	- -	口 2/12	鉄軸 -	2.5YR5/2 灰赤	肥前		X30
13	22	B	SD01 表込	土師器土 上層	11.2 内5.6	2.1 -	口 3/12	-	10YR7/3 にぶい黄褐色	在地	痕跡2段	X28
14	1	B	SE1内 裏方	小杯 磁器	- 3.2	- -	底 9/12	透明軸 金付	9/ 白	肥前	高台砂付着	F19
14	2	B	SE1内 裏方	土師器土 上層	- -	- -	口 4/12	-	7.5YR7/4 にぶい黄	在地	痕跡1/12以上	F22
14	3	B	SE1内 下尻履	小杯 磁器	4.7 -	- -	口 3/12	透明軸 金付	9/ 白	中国か		F17
14	4	B	SE1内 下尻履	土師器土 上層	13.2 8.0	3.1 -	底 12/12	透明軸 金付	9/ 白	肥前	高台砂付着、繪 花16弁	F18
14	5	B	SE1内 下尻履	土師器土 上層	19.0 -	- -	口 2/12	青磁輪	2.5YR/1 灰白	肥前	内外両面入	F20
14	6	B	SE1内 下尻履	向付 陶器	- -	- -	- -	緑釉・長石釉 鉄結	2.5Y7/1 灰	美濃	青龍胎、内外両 面入	F21
14	7	B	SE1内 下尻履	土師器土 上層	12.4 内7.6	2.4 -	口 4/12	-	10YR8/3 改黄褐	在地		F15
14	8	B	SE1内 下尻履	土師器土 上層	11.1 内6.4	2.2 -	口 5/12	-	10YR8/3 改黄褐	在地		F16
14	9	B	SE1内 下尻履	土師器土 上層	10.2 内4.4	2.2 -	底 5/12	-	10YR8/2 灰白	在地	油痕5/12以上、 内外両面剥離	F12
14	10	B	SE1内 下尻履	土師器土 上層	11.2 内3.8	2.6 -	口 6/12	-	10YR8/2 灰白	在地	内面1回付着	F13
14	11	B	SE1内 下尻履	土師器土 上層	8.0 内3.6	1.8 -	口 3/12	-	10YR8/3 改黄褐	在地	内外両面黑色付着 物	F14
14	12	B	SE1内 上層	土師器土 上層	6.0 -	- -	底 2/12	透明軸 色紙(赤・金)	9/ 白	九谷	蛇目同形高台。 内面赤・金、赤 文字、色紙か	M45
14	13	B	SK3	土師器土 上層	12.0 内8.0	2.3 -	口 2/12	-	7.5YR7/4 にぶい黄	在地	痕跡全周	M19
14	14	B	SK3	土師器土 上層	10.8 内6.2	2.3 -	口 10/12	-	10YR7/3 にぶい黄褐色	在地		M16
14	15	B	SK3	土師器土 上層	10.8 内5.6	2.1 -	口 4/12	-	10YR8/3 改黄褐	在地	痕跡1段	M17

図面 番号	区分	区域	建機 種別	機材 名	法量 a	法量 b	法量 c	法量 d	准存	輸送 単位	粘土 色別	産地	備 考	実測 番号
14	16	B	SK3	土師器皿 土器	7.6 内4.2	2.1 -	11 2/12	-	-	透明軸 染付	10YR7/3 に赤い黄斑	在地	溝痕1段	N18
14	17	B	SK1	陶 磁器	9.7 4.6	7.0 -	底 12/12	-	-	透明軸 染付	N8 灰白	肥前	焼痕	P3
14	18	B	SK1	陶 磁器	9.6 6.9	6.0 -	口 4/12	-	-	透明軸 染付	N8 灰白	肥前	高台内 重層 A	P9
14	19	B	SK1	陶 磁器	8.8 -	- -	口 4/12	-	-	透明軸 染付	N8 灰白	肥前	-	F4
14	20	B	SK1	土師器 土器	14.4 8.3	2.7 -	口 4/12	-	-	透明軸 染付	N8 灰白	肥前	高台内 重層 A、見込口跡1 段、被熱	P8
14	21	B	SK1	土師器 土器	12.6 7.5	2.8 -	口 4/12	-	-	透明軸 染付	N8 灰白	肥前	高台内 重層 A	P5
14	22	B	SK1	土師器 土器	13.9 4.9	3.2 -	口 4/12	-	-	外面：透明軸 内面：銅緑色	5Y7/ 灰白	肥前	見込口跡1段、 B区SK1粗砂層と 接合	P6
14	23	B	SK1	土師器 土器	14.4 6.9	3.6 -	口 6/12	-	-	灰軸 鉄軸	7.5YR7/3 に赤い模	越中瀬戸	見込無軸	P7
14	24	B	SK1	土師器 土器	13.0 5.6	3.1 -	口 7/12	-	-	灰軸 印花	7.5YR7/3 に赤い模	越中瀬戸	見込無軸、SK1 粗砂層と接合	P1
14	25	B	SK1	テラコッタ 土器	- -	- -	口 1/12以下	-	-	鉄軸 -	10YR7/1 灰白	肥前	-	P2
14	26	B	SK1	煉瓦 土器	(15.2) 10.9	3.4 -	- -	-	-	- 赤褐色	10YR5/4 赤褐色	-	1,100g	F10
14	27	B	SK1	煉瓦 土器	(9.8) 11.2	3.1 -	- -	-	-	- 褐色	5YR7/0 褐色	-	605g	F11
14	28	B	SK1	窯道具 土器	(14.0) (4.3)	(2.4) -	- -	-	-	- 浅黄褐色	10YR5/3 浅黄褐色	-	-	Q67
14	29	B	SK1	陶 磁器	- -	- -	- -	-	-	透明軸 色絵(赤)	10YR5/1 灰白	九谷	内面に赤・桃・ 色見か	X42
14	30	B	SK1	土師器 土器	- -	- -	- -	-	-	透明軸 色絵(赤・桃・不 明・金)	10YR5/1 灰白	九谷	内面に赤・桃・ 不明、外面に 赤・金、割口に 赤・色見か	X41
14	31	B	SK1	土師器 土器	- 12.0	- -	底 1/12	-	-	透明軸 色絵(赤)	10YR5/1 灰白	九谷	高台内に赤・見 込赤・赤・色見か	X40
15	1	B	SK2 最下層	小杯 土器	5.8 -	- -	口 4/12	-	-	透明軸 染付	10YR5/2 灰白	肥前	-	T16
15	2	B	SK2 最下層	陶 磁器	4.6 -	- -	底 7/12	-	-	鉄軸 -	2.5Y6/8 褐色	肥前	-	T9
15	3	B	SK2 最下層	土師器皿 土器	16.0 内10.0	2.7 -	口 1/12	-	-	- 灰白	10YR5/2 灰白	在地	見込油痕	T15
15	4	B	SK2 最下層	土師器皿 土器	10.6 内5.8	2.8 -	口 3/12	-	-	- 灰白	10YR5/2 灰白	在地	口縁雲母有	T7
15	5	B	SK2 最下層	土師器皿 土器	11.9 内6.8	2.2 -	口 3/12	-	-	- 浅黄褐色	10YR5/3 浅黄褐色	在地	溝痕3/12以上	T8
15	6	B	SK2 中層南	陶 磁器	8.8 4.6	7.2 -	口 9/12	-	-	透明軸 染付	9/ 白	肥前	高台砂付着	T4
15	7	B	SK2 中層南	土師器 土器	13.8 8.6	3.4 -	口 9/12	-	-	透明軸 染付	9/ 白	肥前	高台砂付着、 SK1瓦礫と接合	T5
15	8	B	SK2 中層南	陶 磁器	8.0 -	- -	口 2/12	-	-	鉄軸・長石釉部分 -	2.5Y7/1 灰白	瀬戸・美濃	溝痕	T3
15	9	B	SK2 中層南	陶 磁器	10.2 -	- -	口 2/12	-	-	鉄軸 -	5Y7/1 灰白	不明	-	T6
15	10	B	SK2 中層南	土師器皿 土器	10.8 内5.9	2.5 -	口 6/12	-	-	- 浅黄褐色	10YR5/3 浅黄褐色	在地	溝痕6/12以上	T1
15	11	B	SK2 中層南	土師器皿 土器	10.8 内5.4	2.2 -	口 3/12	-	-	- 浅黄褐色	10YR5/3 浅黄褐色	在地	外面底部へ起こ し痕	T2
15	12	B	SK2 上層	地産磁 土器	- 4.9	- 内6.2	底 4/12	-	-	- 褐色	7.5YR5/4 浅黄褐色	在地	-	T11
15	13	B	SK2 上層	土師器皿 土器	11.0 内5.9	2.2 -	口 4/12	-	-	- 浅黄褐色	7.5YR5/4 浅黄褐色	在地	外面底部へ起こ し痕	T10
15	14	B	SK2 SA12前面	陶 磁器	- 4.6	- -	底 8/12	-	-	灰軸 -	5Y7/1 灰白	肥前	内外面黄斑	T31
15	15	B	SK2 SA12前面	陶 磁器	- -	- 内6.0	口 4/12	-	-	灰軸 -	5YR6/4 に赤い模	肥前	-	T13

国産品 番号	番号	気風 区	建機 種別	材料 種類	圧入 位置	圧入 寸法	適合	給油 装置	給油 量	座地	備 考	実測 高さ
15	16	B	SK2 SAI2前面	十姉妹 土層	10.8 内7.6	2.5 -	□ 6/12	-	10YR5/3 炭素粉	在地	前庭2段、外庭 部のみ接合	T12
15	17	B	SK2 中層南	蛇 礫岩	-	-	-	透明軸 受け付	9/ 白	中国	高台内砂子付	T25
15	18	B	SK2 中層南	林 礫岩	-	-	□ 1/12以下	透明軸 受け付	9/ 白	中国	-	T26
15	19	B	SK2	蛇 礫岩	10.8 -	-	□ 3/12	鉄軸・炭灰軸 -	K7 灰白	北九州系	溝壁	T34
15	20	B	SK2	陶 陶器	9.8 4.4	7.1 -	□ 3/12	鉄軸 -	7.5Y7/1 灰白	越中瀬戸	-	T20
15	21	B	SK2	小作 陶器	8.6 4.0	3.7 -	□ 3/12	灰軸 -	7.5Y7/1 灰白	肥前	表部即転来切、 SK2中層南と接 合	T2
15	22	B	SK2	且 陶器	10.0 5.6	2.0 -	□ 2/12	灰軸 -	5YR/1 灰白	飯戸美濃	高台内砂子付、 貫入	T28
15	23	R	SK2	且 陶器	13.6 4.6	3.4 -	□ 5/12	灰軸 -	2.5Y7/1 灰白	肥前	内面見込、外面 点石に砂目各2 段、BkSK3・ STOと接合	T18
15	24	B	SK2	且 陶器	13.6 5.2	3.0 -	□ 2/12	灰軸 -	5YR5/6 黄	肥前	見込に砂目3 段、高台に砂目 2段、SK2上層と 接合	T17
15	25	R	SK2	地味水 陶器	16.0 -	-	□ 2/12	透明軸 受け付	10YK7/1 灰白	肥前	-	T14
15	26	B	SK2	ナリ鉢 陶器	27.8 -	-	□ 1/12	鉄瓦 -	10YR5/3 炭素粉	越中瀬戸	-	T21
15	27	R	SK2	ナリ鉢 陶器	30.0 -	-	□ 1/12	鉄軸 -	7.5YK7/4 にぶい黄	肥前	-	T22
15	28	B	SK2	土師古 土器	12.0 内7.8	1.9 -	□ 1/12	-	10YR5/2 灰白	在池	金剛金箔	T27
15	29	R	SK2	十姉妹 土器	19.9 内13.8	2.1 -	□ 3/12	-	5Y7/1 灰白	在地	SK2中層南と接 合	T19
15	30	B	SK2	土師古 土器	9.2 内4.6	2.0 -	□ 6/12	-	2.5YR/3 炭素	在地	口縁部分	T29
15	31	R	SK2	土師古 土器	10.0 内5.6	2.6 -	□ 2/12	-	2.5YR/3 炭素	在地	-	T30
16	1	B	SK4	馬土杯 磁器	-	3.8 -	底 12/12	透明軸 色釉(赤)	7.5YR/1 灰白	九谷	赤文字「吉きた」	XZ5
16	2	R	SK4	龍 瓦	-	(16.0) -	底 1/12	-	5YR/1 灰白	不明	-	XZ4
16	3	B	SK5	且 陶器	16.0 -	-	□ 1/12	灰軸(山) -	7.5YR5/4 にぶい黄緑	肥前	見込砂目第1段	XZ1
16	4	B	SK5	寧 陶器	22.0 -	-	□ 1/12	鉄軸 -	2.5YR5/6 明赤黄	常滑??	-	XZ3
16	5	B	SK5	ナリ鉢 陶器	-	-	□ 1/12以下	-	5Y5/1 灰	越前	-	XZ2
16	6	R	SK5	土師古 土器	11.6 内7.4	-	□ 2/12	-	10YK7/3 にぶい黄緑	在地	曲線1段	XZ0
16	7	B	SK6 下層	小作 磁器	5.0 2.2	2.4 -	完形	透明軸 -	9/ 白	肥前	-	M11
16	8	B	SK6 下層	崎 陶器	-	5.3 -	底 12/12	透明軸・白泥 受け付	6/ 灰	肥前	全面白泥、貫入	M2
16	9	B	SK6 下層	ナリ鉢 陶器	28.4 -	-	□ 2/12	-	2.5YR5/6 明赤黄	肥前	-	M1
16	10	R	SK6 下層	ナリ鉢 陶器	31.0 -	-	□ 2/12	鉄軸 -	7.5R5/2 輪赤黄	肥前	-	M5
16	11	B	SK6 下層	土師古 土器	12.0 内7.6	2.7 -	□ 3/12	-	7.5YK7/4 にぶい黄緑	在池	曲線3/12以上	M12
16	12	R	SK6 下層	十姉妹 土器	11.0 内5.3	2.2 -	完形	-	5YK7/4 にぶい黄緑	在地	SK6上層と接 合、表面全周	M10
16	13	B	SK6 下層	土師古 土器	8.6 内4.0	2.1 -	□ 6/12	-	10YR5/2 灰白	在地	曲線1段	M6
16	14	B	SK6 下層	土師古 土器	12.4 内8.5	2.0 -	□ 8/12	-	10YK7/4 にぶい黄緑	在地	曲線4以上	M9
16	15	B	SK6 下層	土師古 土器	15.1 内9.2	2.9 -	□ 6/12	-	2.5YK7/29 赤沢	在池	SK6上層と接 合、内外意匠異 な	M4
16	16	R	SK6 下層	十姉妹 土器	11.0 内6.0	2.4 -	□ 3/12以下	-	10YR5/3 炭素粉	在地	曲線10/12以上	M13

図取番号	番号	発掘区	遺構層位	母材・種別	数量a 法量b	数量c 法量d	遺存	転写 検付	粘土 色調	産地	備考	実測 番号
19	20	H	SK11	土師器Ⅲ 土器	11.9 内6.8	2.2 -	口 5/12		10YR8/3 浅黄褐色	在地	曲痕5/12以上、 見込部痕	Q10
19	21	A	SK11	土師器Ⅲ 土器	13.9 内9.3	2.4 -	口 8/12		7.5YR7/4 にぶい、黄褐色	在地	外底部の痕	Q24
19	22	A	SK11	土師器Ⅲ 土器	12.2 内8.2	2.4 -	口 2/12		10YR8/4 浅黄褐色	在地		Q23
19	23	A	SK11	土師器Ⅲ 土器	8.8 内5.2	-	口 2/12		10YR7/3 にぶい、黄褐色	在地		Q25
19	24	B	SP1	竈 磁器	9.0 1.9	3.8 7.1	口 6/12	透明釉 染付	9/ 白	肥前	漆器	N38
19	25	H	SP1	碗 陶器	14.0 3.8	7.7 -	底 12/12	灰釉 -	5Y7/1 灰白	京・信	漆器、被熱	N37
19	26	B	SP1	土師器Ⅲ 土器	11.0 内6.2	2.2 -	口 3/12		10YR7/4 にぶい、黄褐色	在地	曲痕1枚	N39
19	27	B	SP2	土師器Ⅲ 土器	12.0 内7.8	1.5 -	口 3/12		7.5YR7/4 にぶい、黄褐色	在地	曲痕2枚	N40
19	28	H	3層(砂層)	ナリ鉢 陶器	30.3 -	-	口 1/12	鉄粉 -	10YR8/3 浅黄褐色	越中瀬戸		Q31
19	29	B	第2層下黄砂	皿 磁器	12.1 4.7	3.2 -	口 6/12	透明釉 染付	N8/ 灰白	肥前	高台内襷付若	Q30
19	30	H	第2層下黄砂	碗 陶器	9.4 3.5	6.7 -	口 3/12	透明釉 染付	N8/ 灰白	肥前	高台襷付砂目	Q28
19	31	B	第2層下黄砂・砂利上面	皿 陶器	13.0 3.1	3.2 -	口 1/2	鉄粉掛分 -	10YR8/3 浅黄褐色	越中瀬戸		Q29
19	32	B	第2層下黄砂	皿 磁器	9.1 -	-	底 1/12	透明釉 色絵(赤・青・朱)	10YR8/1 灰白	九谷	色見か	Q63
20	1	A	第1層	甕 陶器	20.9 14.7	25.0 -	口 2/12	鉄粉 -	10YR8/8 赤褐色	肥前	内外面・内面底部 2枚	M39
20	2	A	第1層	甕 陶器	10.6 -	-	口 1/12		8/ 灰白	信楽	自然産	M32
20	3	A	第1層	ナリ鉢 陶器	37.6 18.6	15.0 -	底 12/12	鉄粉 -	10YR5/1 褐灰	北陸産	見込・高台粘土 目5枚	E39
21	1	B	第1層	片口鉢 陶器	18.9 7.6	9.3 最大幅 22.0	口 2/12	灰釉 鉄粉	5YR6/1 褐灰	肥前	見込・高台粘土 目3枚	M34
21	2	B	第1層	紅皿 磁器	7.1 2.4	2.5 -	口 6/12	透明釉 染付・色絵(赤)	9/ 白	肥前		M35
21	3	B	第1層	皿 磁器	10.8 -	-	底 1/12	透明釉 色絵(赤)	7.5YR8/1 灰白	九谷	上絵付窯製品か	M36
21	4	B	第1層	皿口鉢 陶器	-	-		透明釉 色絵	10YR8/1 灰白	九谷	色絵(赤・黒・ 緑・金・不明)	M49
21	5	B	第1層	皿 磁器	-	-		透明釉 色絵(赤)	7.5YR8/1 灰白	九谷	上絵付窯製品か	M37
21	6	B	第1層	皿 磁器	-	-		透明釉 色絵(赤・金)	9/ 白	九谷	色見か	M51
21	7	B	第1層	皿 磁器	-	-		透明釉 色絵(赤・青・ 黒・不明)	10YR8/1 灰白	九谷	色見か	M46
21	8	B	第1層	不明 磁器	-	-		透明釉 色絵(赤・金・不 明)	10YR8/1 灰白	九谷	色見か、金は記 号か	M47
21	9	H	第1層	不明 磁器	-	-		透明釉 色絵(赤・金・不 明)	9/ 白	九谷	色見か、金は記 号か	M50
21	10	H	第1層	皿 磁器	-	-		透明釉 色絵(赤・金・黒)	10YR8/1 灰白	九谷	色見か、金は記 号か	M48
21	11	H	第1層	皿 磁器	-	-		透明釉 色絵(赤)	7.5YR8/1 灰白	九谷	上絵付窯製品か	M38
21	12	B	第1層	高台基 陶器	- 7.2	-	底 2/12	灰釉 -	2.5YR/2 灰白色	京・信	内面と外底部・ 側面に赤色顔料 付着	Q68
21	13	B	最下層	皿 陶器	10.6 3.1	2.05 -	口 2/12	灰釉 -	2.5YR/1 灰白	瀬戸・美濃	買入	Q34

记录序号	站号	站名称	地质情况	埋深(m)	水位(m)	流量(m³/s)	流速(m/s)	流向	特殊标记	站水类型	源地	备 考	记录序号
21	14	C	下槽	铁板	10.3 8.85	6.7 -	-	口 2/12	透明相 色(赤、黄、黑、 绿、黄、蓝、黑)	9/ 白	肥渡	高(内)一堤顶路 A、高(外)内村路 B	035
21	17	A	上槽	铁板	-	-	-	-	透明相 色(赤、黄、黑、 绿、黄、蓝、黑)	9/ 白	肥渡	-	044
21	16	A	1槽	木槽 十厘米	4.7 2.4	2.4 芯径 1.1	-	底 12/12	-	10W7/2 以深、黄绿	在地	-	003
21	17	A	上槽	铁板	-	-	-	-	透明相 色(赤、黄、黑)	9/ 白	九岔	色见A、	043
21	18	B	整土槽	木槽 十厘米	256.85 -	-	-	11 1/12以下	-	5W/1 天	横河	-	032
21	19	B	上(下) 1槽	铁板	12.7 5.9	4.1 -	-	口 8/12	古铜新 -	18 灰白	肥渡	足达肥渡、岸村 等村路	033
21	20	B	十(下) 1槽	铁板	14.0 5.9	4.9 -	4.0 口 4/12	-	灰(白) -	2.378/2 灰白	肥渡	足达(肥)6渡	045
21	21	B	上(下) 上槽	铁板	14.4 5.8	3.5 -	底 16/12	-	透明相 色(赤、黄、黑、 绿、黄、蓝、黑)	9/ 白	肥渡	高(内)一堤顶路 A、高(外)内村路 B	040
21	22	B	上(下) 下槽	铁板	-	-	-	-	透明相 色(赤、黄、黑、 绿、黄、蓝、黑)	9/ 白	九岔	色见A、	054
21	23	B	土(下) 上槽	不锈钢 板	-	-	-	-	透明相 色(赤、黄、黑、 绿、黄、蓝、黑)	9/ 白	九岔	色见A、高(外)内 村路	065
21	24	B	十(下) 上槽	不锈钢 板	-	-	-	-	透明相 色(赤、黄、黑、 绿、黄、蓝、黑)	9/ 白	九岔	色见A、	055

第2表 互觀察表

試験 区分	番号	発色区	造紙 部位	顔料 使用表	胎土色	軸色	機 砂	流量 流量A	流量 流量B	備 考	実測 番号
23	1	B	SE1	平凡 いぶし	88 灰白色	84 灰色	- 藍	29.8 25.5	2.4		E15
23	2	H	SE1	平凡 いぶし	88 灰白色	84 灰色	- 藍	27.1 22.7	2.7		E16
23	3	B	第2層下 瓦面	平凡 いぶし	87 灰白色	84 灰色	- 藍	(13.0) 20.2	1.8	刷印	T32
24	1	A	第1層	枕瓦 全面施釉	2.5YR5/8 明赤褐色	V1.5/0 黒色	少 少	(23.0) (16.4)	1.6 -	刷印、 光沢有	X20
24	2	A	第1層	枕瓦 全面施釉	7.5YR5/6 淺黄褐色	V1.5/0 黒色	少 少	30.6 (18.0)	1.8	刷印、 光沢有	X31
25	1	A	第1層	枕瓦 全面施釉	7.5YR7/6 棕色	V1.5/0 黒色	少 多	30.0 (22.6)	1.9	刷印、 光沢有	X27
25	2	A	第1層	枕瓦 全面施釉	5YR7/6 棕色	5YR5/6 暗赤褐色	少 -	30.0 (27.1)	1.85 -	貫孔1、 その孔に 銅青	X29
26	1	A	第1層	枕瓦 全面施釉	10YR5/8 赤色	10YR1.7/1 赤黒色	少 少	(23.0) (16.2)	2.0	刷印、 光沢無	X29
26	2	C	1層	枕瓦 全面施釉	10YR7/6 明赤褐色	5YR2/1 黒褐色	少 少	26.5 (11.7)	1.9	刷印、 光沢有	E42
27	1	A	上層	枕瓦 全面施釉	7.5YR7/4 にぶい褐色	7.5YR1.7 黒色	- -	26.8 30.8	2.0	刷印、 光沢有	E13
27	2	C	1層	枕瓦 全面施釉	7.5YR7/4 にぶい褐色	10YR2/1 黒色	- -	(11.4) (14.2)	1.8	刷印、 光沢有	E11
28	1	C	上層	亀瓦 全面施釉	5YR6/6 棕色	2.5YR2/1 赤黒色	- -	18.8 (20.0)	1.8 (9.6)	e7.7 導孔1	F44
28	2	C	1層	面・瓦 全面施釉	7.5YR5/3 淺灰褐色	A2/1 黒色	- -	15.1 3.4	1.6 4.8	刷印、 光沢有 針金	E40
28	3	C	1層	軒瓦 全面施釉	5YR7/6 褐色	V1.5/0 黒色	少 少	(26.5) 30.8	2.0 9.5	刷印、 光沢有	X10
28	4	C	上層	朝鮮枕瓦 全面施釉	7.5YR5/6 淺黄褐色	V1.5/0 黒色	少 少	(23.3) 30.0	1.85 9.2	刷印、 光沢有	X33

第3表 石製品觀察表

国産番号	通商番号	発掘区	発掘単位	器 種	材 質				色調	備 考	実測番号
					長さ	幅	厚さ	重量(g)			
22	1	B	SK1	切石	(20.0)	(13.6)	13.0	4800	2.3G/Y7/3 944)〜7/灰色	粗粒	N3
22	2	B	SK8	茶臼	(44.0)			495	10TR/3 2)〜黄褐色	細粒、割口を一部磨石として利用	N2
22	3	B	SK9	磁石	7.5	4.9	1.0	64.27	2.5V7/3 淡黄色	細粒	N1

図版番号	番号	発掘区	遺構・層位	器種	法量				色調	備考	実測番号
					長さ	幅	高さ	重量(g)			
22	4	C	SK3上層	容器か	7.4	(5.4)	1.5	78.39	1018/灰白	粗粒、表面に土	E18
22	5	B	第2層黄砂	基石	2.2		0.4	3.22	N1.5/黒	細粒、定形	E17
22	6	B	検出土	不明	(2.6)	1.8	0.8	10.33	2.5G77/1明 利-ブ 灰色	細粒	N27
22	7	B	第1層	不明	(6.5)	(10.7)	(2.6)	226	7.5V7/灰白	粗粒	E20
22	8	B	土台・上層	容器か	22.0	12.8	6.0	1430	2.5V8/1灰白	粗粒	E19

第4表 金属製品観察表

図版 番号	番号	発掘区	遺構・ 層位	器 種	法 量				材質	備 考	実測 番号	
					a	b	c	d				重量
22	17	B	SK1 瓦器	煙管吸口	4.8	0.41	0.84		5.02	銅	内外面磨多	Q64
22	18	B	SK2 上層	煙管吸口	(2.25)	-	1.0		2.39	銅		Q16
22	19	B	SE1内 下成層	煙管断片	8.5	1.6	1.09	3.2	11.42	銅	断片残	Q62
22	20	B	SK2 上層	煙管断片	6.1	1.32	0.81	2.1	7.59	銅	断片残	Q47
22	21	B	SK6 下層	煙管断片	-	1.6	-	-	1.36	銅	火皿のみ残	Q49
22	22	B	SK6南側 上層	煙管断片	7.3	1.4	0.97	4.45	8.65	銅	火皿内に彩色残 留物有	Q18
22	23	B	SK6 下層	煙管吸口	6.61	0.27	0.85		2.77	銅		Q50
22	24	B	SK6 植栽層	煙管断片	7.6	1.55	1.4	3.6	11.75	銅		Q51
22	25	C	上層	煙管断片	7.0	1.47	0.9	1.9	10.63	銅	内部に鐵線状物 質(断片か)残	Q65
22	26	B	上層 土台下	煙管断片	(4.3)	1.36	-	(2.75)	3.96	銅	火皿に炭化物残	Q53
22	27	B	第2層 黄砂	釘	(5.2)	1.0	0.9		5.16	鉄		Q59
22	28	B	第2層 黄砂	錠	10.3	4.2	3.85		123	鉄		Q58
22	29	B	第1層	携帯墨入	3.6	3.0	4.75	3.85	52.19	銅	背面高3.3cm、 把手孔直径1.3 cm。背面内部に 彩色面状物有	Q15
22	30	B	第1層	携帯墨入表	3.4	3.2	1.3	0.1	11.22	銅		Q44
22	31	B	第1層	火箸	15.35	0.3	0.33		6.68	銅		Q57
22	32	B	整地層	不明	(15.4)	3.3	4.6	0.05	28.3	銅		Q56

第5表 銭貨観察表

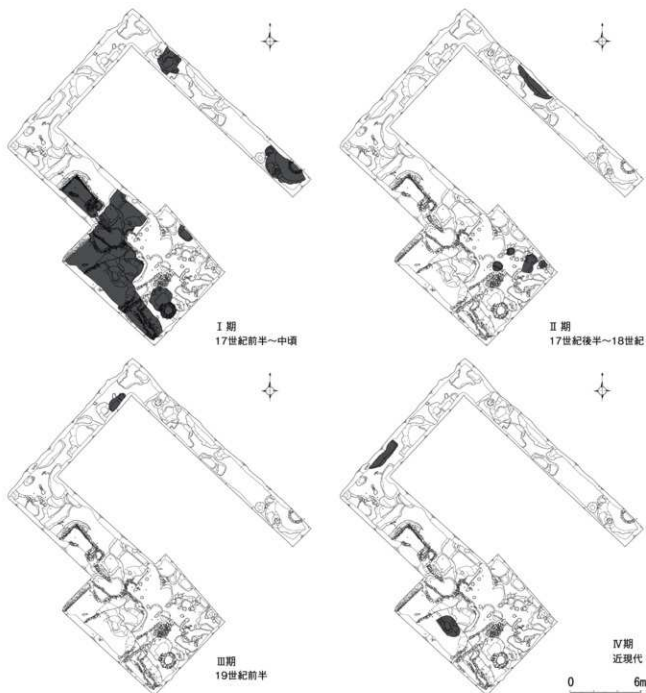
図版番号	番号	発掘区	遺構・層位	法量			材質	表文	裏文	銭種	備考	実測番号
				a	b	c						
22	9	B	SE1内上層	2.25 2.25	0.70 0.70	0.11 2.32	銅	寛永通宝		新寛永		Q10
22	10	B	SK1	2.82 2.83	0.67 0.68	0.14 4.18	銅	寛永通宝	波文	新寛永	波銭	Q39
22	11	B	第2層黄砂	2.32 2.33	0.65 0.65	0.13 2.59	銅	寛永通宝				Q42
22	12	B	第1層	2.52 2.52	0.60 0.60	0.15 2.91	銅	寛永通宝	文	新寛永		Q36
22	13	B	第1層	2.40 2.38	0.68 0.65	0.12 2.71	銅	寛永通宝				Q37
22	14	B	第1層	2.39 2.36	0.60 0.61	0.20 2.66	銅				判断不明 鉄錆も付着	Q38
22	15	C	上層	2.39 2.37	0.59 0.60	0.14 3.10	銅	寛永通宝		新寛永		Q13
22	16	B	土台下上層	2.30 2.30	0.69 0.69	0.12 2.51	銅	寛永通宝				Q41

第4章 総括

調査地は、犀川大橋と香林坊に挟まれた北国街道沿いの繁華街から一本裏道に入った街区で、絵図で居住者が判明する寛文7年以降は、直臣平士クラスの武家屋敷地であった。旧町名では古寺町にあたり、元和年間以前には多数の寺院が集中していた地域として伝えられている。延宝金沢図では阿部甚右衛門・大窪六之丞、文政期の金沢図では阿部・大久保・寺尾喜左衛門、嘉永元年の金城下図では阿部の名が見える。阿部氏は徳川家康に仕えた八右衛門を祖とし、元和2年に甚右衛門が2000石で前田利常に仕え、一甚右衛門吉長一甚右衛門吉忠一三郎一権太夫以忠(1500石)一甚右衛門昌左衛門忠恕一甚右衛門忠喬一久米助と続く。明治初年には衆助直忠の子甚十郎(1500石)がおり、菩提寺は常松寺である。大久保六丞は大久保忠左衛門直重(600石)の弟で300石を録し、一左兵衛喜之喜一喜三太夫依庸一平馬一直記一作次郎一六平忠順と続く。明治初年には忠順の子八忠英(200石)がいた。寺尾氏の詳細は不明である。調査区の内、A区南側とB区は阿部邸、A区北側とC区は大窪(大久保)邸および寺尾邸跡と推定される。

最も古い段階の遺構は、Ⅰ期(17世紀前半～中頃)で、石室SX2、連続する土坑群で区画溝の可能性もあるSX1・SK2・SK7・SK8・SK15、土坑SK3・SK5・SK9・SX3、井戸SE1とSE2およびその掘り方のSK11、石積み溝SD1、石積みSA9である。SK11では覆土に寛永大火(1631年と1635年)のものと思われる焼土が多く含まれていた。Ⅱ期(17世紀後半～18世紀)に廃絶される遺構は土坑SK6・SK13と小形土坑SP1～3である。Ⅲ期(19世紀前半)に廃絶される遺構は土坑SK16である。Ⅳ期(近代以降)に廃絶される遺構は土坑SK1・SK4・SK17・SK19～21・カクラン1と建物基壇SB2である。

本遺跡では、赤絵金彩の色見片と考えられる磁器片や窯道具と考えられる耐火粘土製品、煉瓦などが出土した。幕末～明治の阿部家当主、阿部甚十郎は加賀藩馬廻組で阿部碧海を号し、明治2年に古寺町の自邸に5基の陶窯を築き、80人余の陶工を集めて輸出用の九谷焼を製作させ殖産興業に努めた。石川県立美術館所蔵の色絵金彩海龍図遊環花瓶は、底銘に「大日本九谷／阿部碧海製／春名繁春画」と記され、当時金沢九谷の名工として知られた春名繁春の絵付による明治11年(1878)製造のもので、阿部邸内で生産された輸出用磁器を偲ぶことが出来る製品のひとつである。『定本九谷』には功勞者列伝として次のように記される。「阿部碧海 舊加賀藩士馬廻組にて祿千五百石を食む、明治維新に際しては大に勤王に盡し、同二年長崎及び神戸に支店を出し、且つ士族授産の爲め民山窯の後を承け、金澤古寺町に五基の陶窯を築き、八十餘名の工人を養ひ、内海吉藏を工場長として大に生産に努め、以て金澤九谷の礎を成せり(此窯十二年廢す)、且つ能美郡の松本佐平・松原新助・九谷庄三・江沼郡の大藏清七・淺井幸八等に作業を授け、大に海外輸出に力を注ぎ、巨資を費消して果実に貢献せり、次で圓中孫平の海外貿易を輔け、或は前田侯爵家々令加藤恒を介して宮内省・各宮家・内外貴紳に納品して馨價宣揚に努め功績頗る多し、故を以て明治十八年農商務卿より一等功勞賞を授與せらる。明治四十三年歿す歳六十九。昭和十一年第一回金澤商工祭に際し其功を追頌して祭神に加ふ。(この祭神の撰薦は金澤文化協會評議員八田健一氏、同松本佐太郎の兩名専らこれに任じ、阿部碧海・圓中孫平・納富介二郎ほか五柱を奉奏せり)」また、同書「金澤繪附」の項では、「(前略) 明治二年舊藩士阿部碧海は古寺町の自邸に錦數敷基を築いて内海吉造を職長として、任田徳次(號旭山)小寺藤兵衛(號椿山)其他民山窯以來の陶畫工及び徒弟八十餘名を従業せしめ、盛んに良品を作って神戸及び長崎に支店を設け、内外に販路を擴げた。」とある。なお、『阿部甚十郎旧蔵史料(阿部碧海資料)』が公立大学法人金沢美術工芸大学に所蔵されている。



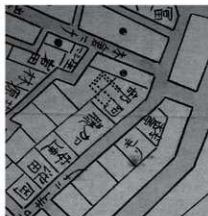
第 30 図 片町 2 丁目遺跡（5 番地点）遺構変遷図



延宝金沢図（石川県立図書館蔵）
延宝期（1673～81年）



金沢図（金沢市立玉川図書館蔵）
文政期（1818～30年）横橋弥三郎図



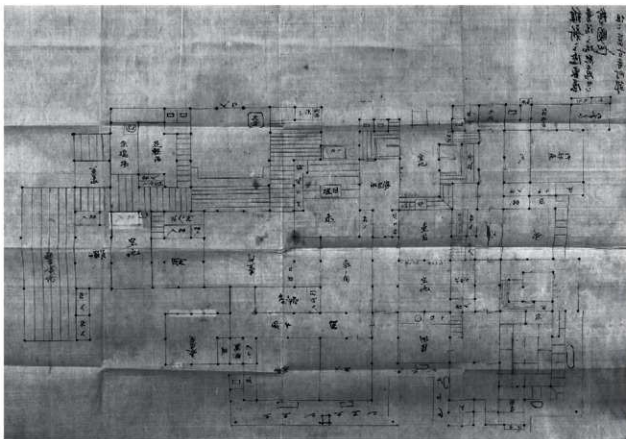
金城下絵図（金沢市立玉川図書館蔵）
嘉永元年（1848年）竹下半次ノ製図

参考文献

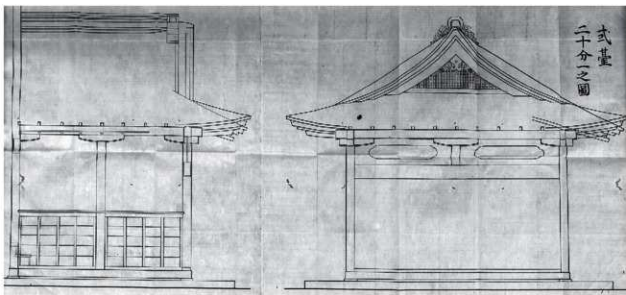
松本佐太郎 1940『定本九谷』寶雲社

石川県姓氏歴史人物大辞典編纂委員会 1998『石川県姓氏歴史人物大辞典』角川書店

金沢市立玉川図書館近世史料館 2011『金沢美術工芸大学所蔵 阿部基十郎旧蔵史料目録 (阿部碧海資料)』



阿部基十郎旧蔵史料(阿部碧海資料)『御屋敷内絵図並御建物絵図・②旧古寺町邸』
(明治初年・公立大学法人金沢美術工芸大学所蔵)



阿部基十郎旧蔵史料(阿部碧海資料)『御屋敷内絵図並御建物絵図・④式台二十分一之図』
(年未詳・公立大学法人金沢美術工芸大学所蔵)

第6表 片町2丁目出土瓦計量表(単位:g)

調査区	遺構	焼瓦						赤片面瓦						赤両面瓦						黒片面瓦						黒両面瓦									
		棧	平	軒平	丸	変斗	小計	棧	平	変斗	雁振	面戸	特殊	小計	棧	軒	軒平	変斗	雁振	面戸	小計	棧	変斗	小計	棧	鎌	軒	軒平	丸	変斗	雁振	面戸	鬼	小計	
A	SK13		850				850							0							0			0											0
	SK15		30				30							0							0			0											0
	第1層		1,690	200	50	130	2,070							0	6,750	90					6,840	1,170	1,170	17,000	2,050	2,000					30	120			21,200
	上層		600				600	550					40	590								0		1,900	600										2,500
	A区小計		3,170	200	50	130	3,550	550	0	0	0	0	40	590	6,750	90	0	0	0	0	6,840	1,170	0	1,170	18,900	2,650	2,000	0	0	0	0	30	120	0	
B	SB土台内第1面(粘砂黄層)						110						110								0		0	20											20
	SE1堀方		4,300		170		4,470							0							0		0												0
	SE1内上層		90				90							0		190				190		0		0											0
	SE1内下成層		6,800				6,800							0							0		0												0
	SK1		780	50	30		860			740				740				430		140	570		0	3,330											3,330
	SK2上層		430				430							0							0		0												0
	SK2上層焼土		200				200							0							0		0												0
	SK2		230				230							0							0		0												0
	SK2南中層		640				640							0							0		0												0
	SK4						0							0							0		0						110						110
	SK5						0							0							0		0		50										50
	SK5(内四)焼土層		20				20							0							0		0												0
	SK7		380				380							0							0		0												0
	SD1ウラゴメ		180				180							0							0		0												0
	SK1粗砂層		4,650				4,650							0							0		0												0
	SK1粗砂層瓦層		6,000				6,000	10						10							0		0												0
	第1層		4,200		150		4,350	250						250	1,400						1,400	1,100	1,100	2,200	31,000	1,200	700		3,050		400				36,350
	第2層上黄砂		240				240							0							0		0	70											70
	第2層上黄砂～焼土		210				210							0							0		0												0
	第2層黄砂		2,850				2,850							0							0		0												0
	第2層下黄砂～砂利上面		1,750				1,750							0							0		0												0
	第2層下瓦層		16,000				16,000							0							0		0												0
	第3層(灰砂)		1,590				1,590							0							0		0												0
	土台下上層		110				110		130	210			460	800	270						270		0	350	140										490
B区小計		51,650	200	200	0	52,050	370	130	950	0	0	460	1,910	1,670	0	190	430	0	140	2,430	1,100	1,100	2,200	34,820	1,340	700	110	0	3,050	0	400	0		40,420	
C	SK19		80				80				80	150		230	280				170		450		190	190	1,900									1,900	
	SE20		80				80						0	40							40				170									170	
	SK21						0						0	10							10			1,150										1,150	
	SK2内						0						0						30	30		0												0	
	SK3上層		220				220						0								0		10											10	
	上層		910				910	60		100			160	460					380	840	150		150	6,500	2,550	3,550		450		1,240		1,100		15,390	
	下層		260		110		370	80					80								0		0											0	
	カクラン						0						0	120							120		40	40	2,490		100							2,590	
	カクラン2上層	310					310							0							0		0											0	
C区小計		310	1,550	0	110	0	1,970	140	0	100	80	150	0	470	910	0	0	0	170	410	1,490	150	230	380	12,220	2,550	3,650	0	450	0	1,240	0	1,100		21,210
種類別重量合計		310	56,370	400	360	130	57,570	1,060	130	1,050	80	190	460	2,970	9,330	90	190	430	170	550	10,760	2,420	1,330	3,750	65,940	6,540	6,350	110	450	3,050	1,270	520	1,100		85,330
総重量計																																			160,380



A 区 (北西から撮影)



B 区 (北東から撮影)



B 区 (南から撮影)



C 区 (南西から撮影)



C 区 (西から撮影)



SB1 (北西から撮影)



SA1~SA3 (左から SA1、SA2、SA3)



SA1~SA3 (南から撮影)



SX2 (北から撮影)



SX2 階段 (北西から撮影)



SX2 北東面 (南西から撮影)



SX2 北西面



左奥 SA4、手前 SA12、右奥 SK7



上から SA5、SK7、SA6、SA7、右 SA13



手前 SA9、奥 SA8 (北西から撮影)



SA11 (南から撮影)



SA12 (西から撮影)



SA14 (東から撮影)



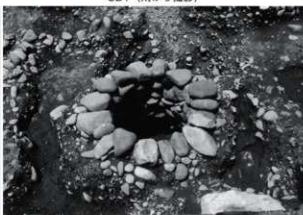
手前から SA17、SA16、SA15 (南西から撮影)



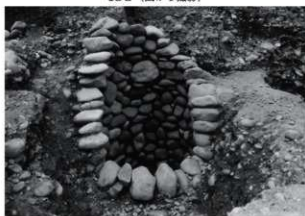
SD1 (南から撮影)



SD2 (西から撮影)



SE1 (東から撮影)



SE1 (西から撮影)



SE2 (南から撮影)



SE2 (南西から撮影)



左手前から SK2、SK1、SK3 (南から撮影)



SK5 (西から撮影)



SK9 (右は SE1、南東から撮影)



SK13 (南から撮影)



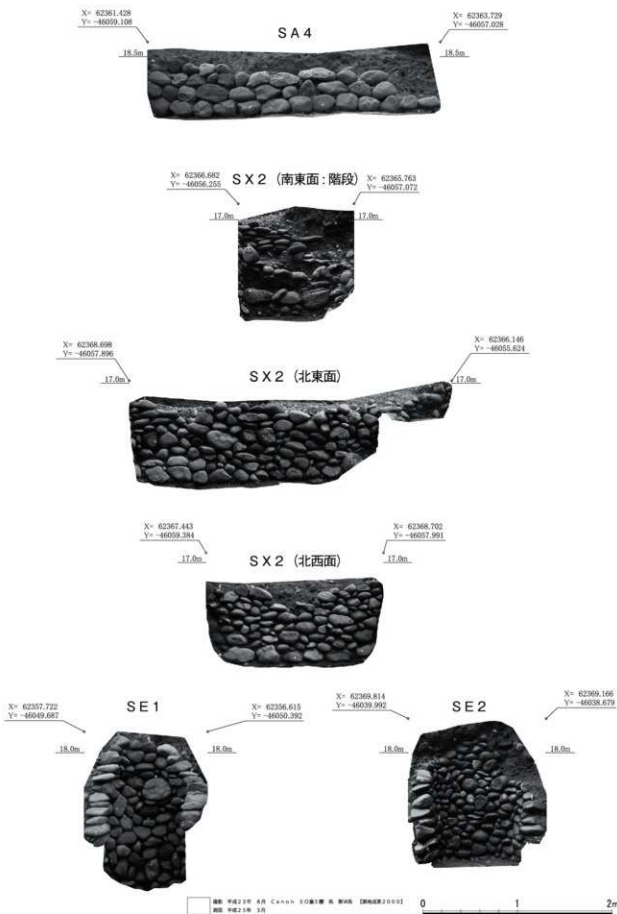
手前 SK16、奥 SK17 (北から撮影)



手前から SP2、SP1 (北から撮影)



左 SP4、右 SP3 (北東から撮影)





SK1出土遺物 (第14図17～28)



SK11出土遺物 (第19図1～22の一部)



第 12 図 1



第 12 図 7



第 12 図 21



第 12 図 23



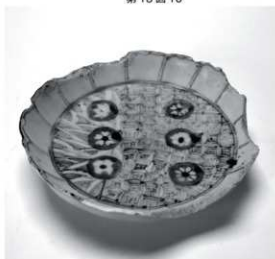
第 13 図 9



第 13 図 10



第 13 図 20



第 14 図 4



第 14 図 7 ~ 11



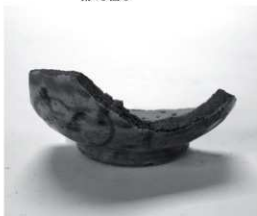
第15図6



第15図7



第16図1



第16図8



第16図11~18



第17図2



第17図4



第17図5



第17図6



第18図10



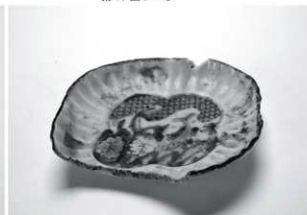
第18図11



第17図7~9



第18図2



第18図3



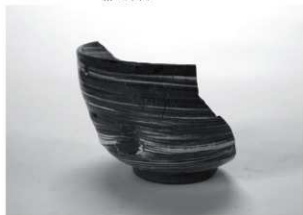
第18図9



第18図12



第18図15



第18図16



第19図24



第20図1



第20図3



第22図1



色見片



第22図2



第23図1・2



第22図29・30



金屬製品 (第22図9～20、22～26)

報告書抄録

ふりがな	いしかわけんかなざわし かたまち2ちょうめいせき (5ばんちてん)							
書名	石川県金沢市 片町二丁目遺跡 (5番地点)							
シリーズ名	金沢市文化財紀要							
シリーズ番号	291							
編集者名	庄田知充 新出敬子							
編集機関	金沢市埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-0374 金沢市上安原南60番地							
発行年月日	西暦2014年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'N	東経 °'E	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かたまち2ちょうめ 片町二丁目 (5ばんちてん) (5番地点)	いしかわけん 石川県 かなざわし 金沢市 かたまち 片町二丁目	72014		36°33'39"	136°39'08"	2011.6.6～ 2011.8.31	657㎡	公共施設建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
片町二丁目 (5番地点)	城下町	江戸時代	地下室、井戸、建物、 石積み、土坑		中国磁器、国産陶磁器、金属製品、 土師器、瓦、窯業遺物		近代金沢九谷の 窯業遺物	
要約								
調査地は、犀川大橋から香林坊に至る北国街道沿いの繁華街から一本裏道に入った街区で、絵図で居住者が判明する寛文6年以降は、直臣平士クラスの武家屋敷地であった。旧町名では古寺町にあたり、元和年間以前には多数の寺院が集中していた地域として伝えられている。延宝金沢図等から調査区は阿部 (1500～2000石) 邸、大窪 (大久保・200～300石) 邸、寺尾邸 (石高不明) 跡と推定される。 遺跡からは、1基の石段を伴う石積みの地下室、区画溝の可能性もある連続する土坑群を含む21基の土坑、2基の石積み井戸、1棟以上の礎石建物、1棟の石列基壇建物、複数の石積みや石列、2条の石積み溝、2基の大形土坑、4基の小穴を検出した。最も古い段階の遺構は、1期 (17世紀前半～中頃) で、寛永大火 (1631年と1635年) に比定できる焼土や焼損遺物を遺構内覆土で確認した。以降、Ⅱ期 (17世紀後半～18世紀)、Ⅲ期 (19世紀前半)、Ⅳ期 (近代以降) に遺構廃絶時期の変遷を追うことが出来る。 また、本遺跡では、赤絵金彩の色見片と考えられる磁器片や窯道具や窯体と考えられる耐火粘土製品、煉瓦などが出土した。幕末～明治期の本調査区に居住していた阿部家当主、阿部甚十郎は加賀藩馬廻組で阿部碧海を号し、明治2年に古寺町の自邸に5基の陶窯を築き、80人余の陶工を集めて輸出用の九谷焼を製作させ殖産興業に努めた人物である。近代金沢九谷の窯業遺物として貴重な資料といえる。								

石川県金沢市

片町二丁目遺跡(5番地点)

(「金沢市文化財紀要291」)

平成26(2014)年3月31日発行

発行 金 沢 市

編集 金沢市埋蔵文化財センター
〒920-0374 石川県金沢市上安原南60番地
TEL (076) 269-2451

印刷 株式会社 キャスト西野
〒920-0922 石川県金沢市横山町25番12号
TEL (076) 222-2839